小林清吾先生を偲ぶ追悼集

小林清吾 1946年~2023年

水道水フロリデーションを
目指す

小林 清吾

Seigo Kobayashi

1946 ~ 2023

「松原（小林）清吾先生を偲んで」追悼集発行について

松原（小林）清吾先生が2023年11月13日に亡くなられましてから、一年が経ちました。

世界の常識である、最強のむし歯予防手段「水道水フロリデーション」を、

清吾先生程求め続けられた先生はいません。新潟大学、長崎大学、日本大学松戸歯学部で、教鞭をとりながら、

世界中の学者と交流する中で、日本各地での実施に向けて、努力を惜しまず、活動をしてこられました。

病気になられたとお聞きしてから、あまりにも早いお別れになりました。

本当に、志半ばでご逝去されたことは、残された私たちよりも、先生御自身の無念さは計り知れないことと存じます。

ここに、生前、先生から水道水フロリデーションを目指して、御指導ご助言を頂いた有志が、

今後、先生の御遺志に報いるよう、精進することをお誓いするためにも、在りし日の先生を懐かしみ偲ぶ

追悼集（HP等にも掲載予定）を発行することになりました。

『故 松原（小林）清吾先生追悼集』製作委員会

＜世話人代表＞　山内晧央

＜世　話　人＞　田浦勝彦・浪越建男・岩城倫弘・田口千恵子
平井城央・髙瀬浩幸・山本武夫（事務局）

小林 清吾先生の軌跡

1946年（昭和21）8月19日　小林家長男として誕生

学歴・職歴

1965年（昭和40）	4月 1日 ～	1971年（昭和46）	3月20日	新潟大学歯学部
1971年（昭和46）	5月24日			歯科医師免許（歯科医籍 第59396号）
	5月16日 ～	1982年（昭和57）	3月31日	新潟大学助手（歯学部付属病院予防歯科）
1982年（昭和57）	4月 1日 ～		9月30日	長崎大学講師（歯学部予防歯科学講座）
	6月29日			歯学博士（新潟大学 第27号）
	10月 1日 ～	1987年（昭和62）	10月31日	長崎大学助教授（歯学部予防歯科学講座）
1987年（昭和62）	11月1日 ～	1998年（平成10）	3月31日	新潟大学助教授（歯学部予防歯科学講座）
1998年（平成10）	4月1日 ～	2012年（平成24）	3月31日	日本大学教授（松戸歯学部・衛生学講座）
2000年（平成12）	10月1日 ～	2004年（平成16）	3月31日	日本大学松戸歯学部附属歯科衛生専門学校校長
2009年（平成21）	4月1日 ～	2012年（平成24）	3月31日	日本大学松戸歯学部口腔科学研究所所長
2012年（平成24）	4月1日 ～	2016年（平成28）	3月31日	日本大学客員教授

海外出張歴

1993年（平成 5）	9月 1日 ～	1994年（平成 6）	10月15日	米国歯学研究所（NIDR/NIH）客員研究員 文部省在外研究員
1996年（平成 8）	5月 1日 ～		7月30日	豪州アデレード大学歯学統計研究所（DRUR） 客員研究員
1997年（平成 9）	2月 1日 ～		2月28日	豪州アデレード大学歯学統計研究所（DRUR） 客員研究員

外部委員歴

1998年（平成10）	12月 1日 ～	2000年（平成12）	11月30日	千葉県歯科保健医療協議会委員
2004年（平成16）	1月 1日 ～	2004年（平成16）	12月31日	科学研究費委員会委員（独法）日本学術振興会
	4月 1日 ～	2020年（令和 2）	3月31日	医薬品医療機器総合機構専門委員会委員（独法）医療品医療機器総合機構
	5月19日 ～	2008年（平成20）	3月31日	日本医学会新規加盟審査委員会委員
2006年（平成18）	4月 1日 ～	2012年（平成24）	3月31日	千葉県・食育と口腔円卓会議・副議長

学会歴

1983年（昭和58）	4月 1日 ～	2012年（平成24）	5月	日本口腔衛生学会・評議員（法人化後は理事）
1991年（平成 3）	4月 1日 ～	2012年（平成24）	5月	日本口腔衛生学会・理事
1998年（平成10）	4月 1日 ～	2012年（平成24）	3月31日	日本大学口腔科学会・理事
2001年（平成13）	4月 1日 ～	2005年（平成17）	3月31日	日本口腔衛生学会・常任理事：フッ化物応用委員会委員長
2005年（平成17）	4月 1日 ～	2023年（令和 5）	11月13日	日本口腔衛生学会・フッ化物応用委員会委員
2011年（平成23）	10月 8日 ～		10月10日	第60回日本口腔衛生学会・総会会長
2012年（平成24）	5月 ～	2023年（令和 5）	11月13日	日本口腔衛生学会・名誉会員

「清吾先生のこと」

山内 皓央

想い出の何かと慌てて資料-例えば記念写真、ツーショットの写真とか思ったら1枚も写真を撮った事はなかったのかもしれない。普段電話で会話は仕事の話と軽い冗談以外ほとんどしたことがないと気が付いた。　どうもお孫さんが2人以上、いるようで、双子さん?

夕方、電話すると大抵お風呂にお二人をサポートしている一緒に入っているらしく、でもそれ以上の事はほとんど知らないできた。そんな関係で昭和45, 6年、半世紀ほどのつながりはある訳だ。日大松戸をリタイヤして新潟漆山に菜園を、自慢の紅い苺の写真だけがテーブルに貼ってあった。2019年春の日付。その頃、2度ほど、漆山に立ち寄って、農園視察を覚えている。コロナ渦では、専ら声だけの繋がりに甘んじて過ごしてきた。健康障害の情報も気になった。

清吾先生からのLINE【斜体字】は小生のメール ～2023年～

4月20日(木)

【*小生入院中、総胆管結石、内視鏡診察処置。同窓後輩仲間のダヴィンチ手術の話を伝える*】
【*お互いに慰め合う…*】

明日は体調改善のために泌尿器科の先生の診察を受ける予定です。

4月25日(火)　19:30

夜間、トイレが近くなって、でもお薬が効いてきたよかった。
イチゴ畑のことでも考えようか。
こんな環境も自分をよく生かすために準備された事。
全て感謝、感謝のストーリーに書き換えています。

4月30日(日)　21:50

夜間のトイレ薬が効いたり効かなかったり、
ちょっときつい6月8日の本来の検査日まで体がもつかやや不安。
しかしこれも何かの足がかりで結果が最良になるための
布石と考えている。

5月2日(火)　15:00

午前中何とか、泌尿器科受診しました。
午後から弥彦村へ出かけてきました。

5月3日(水)　14:30

もう何十年も前に終わったことが代わるがわる、夢に出てきます。
境先生がご尽力された学会の「水道水フロリデーション推奨声明」。
フッ化物応用委員会の委員長を境先生から引き継いでの1年目、
何とか実現したいと意気込んで取り組んでいたときの
風当たりがビュービューと。

5月17日(水)　02:30

【*小生5月15日に退院しました。まだヨタモタしてます*】

06:40

おはようございます。晴れてご退院、おめでとう御座います。
進んだ医学にい感謝です。改めて見る庭や山々の風景も
何か違いますでしょう。重ねておめでとうございます。
昨日弥彦村の、議員さんが奥様と2人でお見舞いに来てくれました。
家内も同席でき、とても嬉しいことでした。

5月23日(火)　07:20

身体の調子いかがですか。こちら、薬の効き方も
まだまだ気分のレベルです。
6月8日のがんセンター初診日まで良い子になって我慢しています。
学会、無事に開催できたようでほっとしております。

5月26日(金)　20:20

チャングムが再放送されています。
我が身に照らして涙ぐんでいたら、お前アホかと言われますね。
オホホホ!! 誠実者が最後には幸せになるとてんてん。
空豆は食べますか? 私は好きで。
はい! ここで1句 「空豆に　負けず胸はれ　1年生」
孫たちへの応援歌です!

5月27日(土)　07:40

そら豆より、枝豆「弥彦むすめ」の方が良いでしょうか?
小冊子「水道水フロリデーション」、もっとわかりやすくしたいーッ、
中を小分けにしてもいいし～。

5月30日(火) 07:45

やはり、自分で責任を取る体力がないものは、
なかなか意見は言えないでしょうね。
しかし出版されてみれば良い反応が出る場合が多いし、
今回はそれに期待します。
漫画本のほうも細かいところはいろいろ注文がありそうですね。
下仁田町と川崎愛児園でのそれぞれ17年5年の実績、
地道な活動の意義をアピールするパンフレットを出したいと
思っております。
下仁田町では17年間住民啓発学習を詰めた上で、
根本には科学的根拠の安全性が必須ですが、
住民にとって直接利害につながる体験と「安心」が大切、
との考えに基づいて活動していらっしゃいます。
愛児園では健康と生命まで奪われかねないハイリスク環境から
救われた子供たちに、今、我々が支援できる予防歯科的環境作りの
1つとしてフロリデーションを提供しています。
フロリデーションの了解にはこのような小さな体験を日常的に
体験する事が、理屈・理論を重ねるより有効だとの考えから
行ってきています。

16:35

支援の必要
飲料水のフロリデーションは家庭から、小さな、大きな地域まで
それぞれに対応した装置・施設が工夫され実施稼働されています。
国内で身近なところで稼働している事例があれば非常に
勇気づけられるものと思います。
なかなか表現するのは大変のようです、坂は後ろから押すより、
緩やかな坂にするこれが大事なのかもしれません。
体調、下痢がおさまってきてほっとしています。頻尿のほうは
相変わらずこれが現実と素直に受け入れ、体調管理、
後1週間ほどでがんセンター初診日、がんばります(朝6時34分)
昼12時33分またちょっと不調、しばらく難題は棚上げにして
いきましょう。病気との戦いがんばりましょう。

6月2日(金) 15:40

むし歯予防週間4日から10日まで。
一方、水道週間とやらは1日から7日まで。
2つのテーマが重なった4日5日6日7日は
水道水むし歯予防(フロリデーション)の日、と提唱したいところです。

6月5日(月) 10:50

電話できますか

6月10日(土) 10:03

一昨日8日、がんセンターでの初診日予約血液、尿、触診、
レントゲン、心電図などの予備検査終了。
次回MRIは6月12日、生検は6月28日29日に決めて貰いました。
検査だけなのに、かなり体力を消耗します。
ゆっくり体を休ませます。この一歩一歩が病気との戦いと思って。
必ず克服して、元気になって、弥彦村水道水フロリデーション活動の
お手伝いに専念したいと存じます。

6月12日(月) 11:10

秋になったら弥彦神社に山梨の友達連れがおいで下さるとの事、
楽しみにしています。
秋の紅葉、秋には私も元気になっていますよ。

6月19日(月) 11:00

来週28日の生検待ちです。体調はまだまだ何合目、
良い日はとても楽です。私はやっぱり変な人のようです。
頭変えられないことですが。
頭体調が良いとなんと自分応援歌(若い力)が本当に聞こえてくるんです。
昨日は聞こえていました。

【*♪♪♪♪♪♪若い力と感激に～♪♪年寄り合唱団！*】

6月20日(火) 15:00

うーむ！
心情的に1番私を応援してくれている仲間の先生から
難しいメールが来ました・・・・・・・・・。
「今ぞ、この一歩」問題は活動の仕方、戦略、戦術の事らしいです。
今年同門生宛の年賀状に「みんなで始めて50年、いろいろあって、
ゴールはみんなで一緒に」と訴えました。
これが非現実的だなと批判されました。また同じ失敗を繰り返すのか！と。
昨夜は頻尿でとても辛かった。ところが今朝以降、体調が良く、
いい感じです「自分応援歌」が聞こえてきています。
「迷い、つまずき、道なき道を、目指す遥かな星1つ」
「暗い時ほど、よく見える。待てば微な雪明かり」
「いつか誰かの踏み石になる。抜かるな、今ぞ、この一歩」

10月14日(土) 18:14

<LINE通話>
今入院してるまま、だよ。

― 10分ほどお互いの病状報告 ―

来週の火曜日には退院だよ。

【*あぁ、よかったねーじゃあ来週の水曜日か木曜日に電話するよ……
夕飯きたみたい。 じゃあ電話切るよー。来週ね*】

2015年 箱根会議

2015年 箱根

清吾先生の自分応援歌…【若い力】

1 若い力と感激に 燃えよ若人胸を張れ
歓喜あふれるユニホーム
肩にひとひら花が散る
花も輝け希望に満ちて 競え青春 強きもの

2 薫る英気と純情に 瞳明るいスポーツマン
僕の喜び君のもの
上がる凱歌に虹がたつ
情け身にしむ熱こそ命 競え青春 強きもの

（山内 晧央）

田浦 勝彦

「小林 清吾 先生」

浪越 建男

清吾先生との突然の別れが、いまだに埋めようのない寂寥感をもたらしています。

清吾先生との出会いは、私が学部1年の時でしたので40年前ということになります。今の時代なら問題になるパワハラさえも許されていた時代の中で、学生を「さん」付けで呼び、ひとりの「人」として接してくださる異色の教官でした。振り返ると私が歯科医師として生きる上では、欠かすことのできない、そして幸運な出会いだったと断言できます。

新設された長崎大学歯学部の学生に、う蝕予防におけるフッ化物の効果・必要性・安全性、公衆衛生的施策そしてフロリデーションについて熱く語り続けていました。そしてその姿勢が生涯変わらなかったことは、皆様よくご存知だと思います。

長崎大学歯学部の坂道を登りながら「浪越さん、疑わしきは罰せず、う蝕かどうか疑わしい歯は削ったらダメなんです」とよく聞かされました。そして話はフロリデーションにたどり着きます。石畳とそれの上を覆う緑と、歩調を合わせながら語りかける清吾先生の表情や口調は今でもはっきりと浮かんできます。

清吾先生が母校の新潟大学に転任され、その後私は長崎大学歯科補綴科の大学院生、助教として時間を過ごしたため疎遠になりました。1994年故郷の香川県に開業したことを機に、清吾先生から学んだフッ化物の知識をフル活用することになり、そこから清吾先生との繋がりは太いものとなりました。

開院30年目、町内で集団応用フッ化物洗口（4〜14歳）が始まり28年が経過しました。フッ化物洗口2世代目となり、地元で生まれ育った子どもたちのほとんどがカリエスフリーで成人を迎えています。フッ化物洗口は6年前から市内全町へと実施拡大しました。これは清吾先生の教えがもたらしたものです。

しかし清吾先生いちばんの願いは我が国でのフロリデーションの実現、そのバトンを私たちは受け取っています。

「小林清吾先生以降のウォーターフロリデーションファンド」

岩城 倫弘

小林先生、認定特定非営利活動法人ウォーターフロリデーションファンドは存続いたします。これ以上は書くことができません。空からみといて下さい。

「小林清吾先生のこと」

田口 千恵子

2023年11月13日の朝いただいた瞭奥様のお電話‥、いつかは来ると思えば、‥ではありますが、あまりにも急な突然の出来事で、言葉に気持ちに窮しました。前々日にお会いしたばかりだったのに、今度はいつ伺おうかと話して帰路についたのにと、何か違うのでは？と思わずにはいられません。今でも、なお、です。

清吾先生との思い出をと思いつつ、何をどう書いていけばよいのかと、途方に暮れてしまいます。様々なことが思い出されるのですが、やはり、まとめることができません。

清吾先生からのいくつかの言葉を記させていただくことで、追悼にと思います。清吾先生は、よく「私は偉い人、年上の人が、正しいことをしない時には、許しません、絶対に戦います」と言っておられました。また、「偉い人が難しいというのが許せません、偉い人がそういうと聞いている人は、できないと感じる。影響力があることを意識するべきであり、自分が難しいだけであって、自分以外の人も難しい、というのは傲慢です」。水道水フロリデーションにつながる事からの言葉です。日本での水道水フロリデーションは、叶わない目標ではないことも常に言われておりました。自分ができなくても次の方々が行える状況を少しでも私は作りたいとも。

また、清吾先生は、歌を歌うこともお好きでした。さだまさしさんの「無縁坂」‥“母がまだ若いころ、僕の手をひいて、この坂を登る度いつもため息をついた、ため息つけばそれで済む、後だけは見ちゃだめと‥”この歌を口ずさまれる時は、少し気を弱くされているなと思いましたし、国民体育大会の歌である「若い力」‥“若い力と感激に燃えよ若人‥”この時は“ファイター小林君の歌ですよ”と、その通りやる気漲る時に歌われていたように思います。また、退職され新潟で活動をスタートされた頃から、自分応援歌を作られ、“強く優しく生きるぞと　誓った後から　しくじりばかり。　出来る事だけ、それだけでいいと　母の笑顔がまた滲む”この応援歌のメロディーは、島倉千代子さんの「この世の花」とのことでした。この自分応援歌は、清吾先生の声で聴くことがかないませんでした。句も作られており、「伊夜比古の麓に咲いた予防歯科　朝の白雪　映す子らの歯」、この句は故堀井欣一先生、境　脩先生に捧げるものです、と記されておりました。清吾先生とは、病に倒れられても水道水フロリデーションがテーマの会話（line交換）を重ねていました。

清吾先生にご指導いただき、長い時間をともに過ごさせていただいた一人として、清吾先生の思い、言葉を忘れることなく受け止め、清吾先生がずっとずっと思い続け、活動を止めることなく進まれてきた水道水フロリデーションの実現につなげていきたいと思っています。

“ファイター清吾先生、まだまだ眠られずに、その世界から共に、“愛と科学と勇気持ち、
今　上流へ”（清吾先生の言葉です）　向かいましょう”

「小林先生を偲んで」

日本医科大学大学院　**平井 城央**

2004年4月上旬、日大松戸に入学し、歯学部の講義を受け始めた自分は、初めて聞く歯科関係の用語にひたすら面食らっておりました。初めの一週間が終わるという最後の授業、それが清吾先生との初めての出会いでした。今まで授業をされていた先生方とは違った優しげな雰囲気、笑顔で入学したての1年生を気遣うような授業がとても印象的で一気に先生のファンになりました。

歯学部での学生生活に慣れてきた1年生の6月中旬・・・楽しみにしていた清吾先生の講義の時間、今日の講義で先生はどんな事を教えてくださるのだろうと楽しみにしていました。先生はフロリデーションについて講義をしてくださいました。その講義こそ長年、自分がずっと不思議に思っていた事を解き明かしてくれた瞬間でした。

自分は小学校、親の仕事の関係で２校通いました。千葉県の市川市にある中国分小学校、米国Ohio州の州都ColumbusにあるWinterset Elementary School。両小学校はとても対照的でした。

中国分小では給食後に歯磨きの歌を流して、児童全員に食後の歯磨きを習慣付けていました（そういう取り組みが評価され、全日本良い歯の学校に認定され文部大臣賞を受賞しました）。Winterset小では食後や休み時間には水飲み場に行って水道水を飲むようにという指導だけで、給食後の歯磨きは一切ありません。中国分小の給食は、う蝕リスクを避けるという事で甘い物は極力排除されていたのに対し、Winterset小の給食はチョコレート牛乳、プリン、ソフトクッキーといったう蝕リスクの高いものが毎日のように出されていました。

しかしながら、う蝕になる友人の数は中国分小学校の方がはるかに多いのです。「う蝕防止に効果があると指導されてきた歯磨きをしている中国分小」よりも「歯磨きもしない・う蝕リスクの高いものを給食に出しているWinterset小」の方がう蝕になる友人が少ない・・何でだろう・・・ずっとずっと不思議に、疑問に思っていたのです。小学校以来、大学入学までずっと疑問に思っていた事に対する答えを清吾先生は講義で教えてくださったのです。フロリデーションであると。

この講義はまさに目から鱗でした。講義終了後、すぐに清吾先生ところに伺いまして、自分の体験談をお話しましたら、先生はニコニコしながら「オハイオ州コロンバスもフロリデーション地域ですよ。平井くんはフロリデーションの恩恵を受けてたのですね。素晴らしい事です！」と、仰ったのを今でも鮮明に覚えております。

2005年米国水道水フロリデーション60周年記念式典
清吾先生と参加した若手歯科関係者

そんなご縁もありまして1年の後期から始まったゼミ（教室配属）は迷う事なく清吾先生の講座に入れていただきまして、先生からは公衆衛生を中心に色々な事を教えて頂きましたADAで開催されたフロリデーションシンポジウムにも連れて行っていただきましたし、岡山大学で開催されたAsian Academy of Preventive Dentistry（AAPD：アジア予防歯科学会）では発表までさせていただきました。自分の妹がOLから歯科衛生士になったのも先生からのご助言がきっかけでした。

公私共に、先生にお世話になった数が星の数に匹敵するのではないかと思います。

先生と最期にお電話でお話をしたのも弥彦のフロリデーションの案件でした。「平井くん、フロリデーションがいよいよ日本でも再び始まりましたよ！と発表しに、またシカゴのADAに一緒に行きましょう！」とお話してくださった事を昨日のように覚えてます。

今でも「平井くん、ちょっと意見を聞かせてください」「平井くん、この件について知ってませんか？」と先生からお電話がかかってくるのではないかと感じるくらい、先生がもうこの世にはいらっしゃらないという現実を認識できていない自分がおります。普段から健康には人一倍気をつけていらした先生が、こんなに急に亡くなれてしまったという事実が信じられないです。

いつか先生にまたお会いできる刻が来たら「先生、フロリデーション、日本でも復活しましたよ。先生が敷いてくださったレールの上に車両が走り始めましたよ！」とご報告できるよう、残された我らで、フロリデーションの実現に頑張っていかないといけません。

松戸市内での教室あげての啓発普及活動、テント前の清吾先生

髙瀬 浩幸

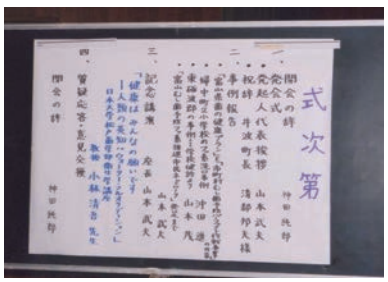
「清吾先生、有難う御座いました」

富山県　**山本 武夫**

清吾先生（1期生）は、大学の6年先輩です。私は、大学卒業後、2年間、千葉の開業医の先生の所に勤務し、富山の田舎である地元に帰ってきて、開業しました。開業して3年目で、県歯科医師会公衆衛生委員会に配属されました。同じ委員で「むし歯予防」というのに、フッ化物応用の知識がある歯科医はほとんどおらず、学生時代に、境　脩助教授の講義を受けた人間としては、何とかしなくてはと、富山県出身の2年先輩の当時新潟県庁におられた石上先生や清吾先生に講演会や研修会の講師をお願いしました。

昭和60年から県学校歯科医会理事、63年から県歯科医師会理事を小生が務めるにあたり、何度も清吾先生のお陰で、富山県内におけるフッ化物洗口の道筋も広がっていき、平成6年に策定された「富山県歯の健康プラン」には、当時県厚生部長の吉田哲彦先生（元新潟県歯科保健課長）からも清吾先生の尽力に感謝されました。

その後、平成12年厚生省の「水道水フッ素化容認」というニュースが出て、県内での歯科医師会としての活動を開始しようとした際、上司と意見が合わず、私自身が13年間務めた県歯科医師会理事を辞任しました。また、ボランティア活動を宮崎県子どもの歯を守る会の故山下文夫先生（元日F事務局）に習ってはじめていた時期でもあり、辞任を契機に、韓国釜山への水道水フロリデーション施設研修や、「And You（あゆ）の会：富山むし歯予防フッ素推進市民ネットワーク」の活動を始める方向に舵を切りました。平成13年5月に、この会の発会式をする際には、腎臓の病気から快復されたばかりの日大松戸歯学部の教授になっておられた清吾先生に、「健康はみんなの願いです～人類の英知：水道水フロリデーション～」と題して記念講演を行って頂きました。この発会式から、私自身のWF活動がはじまりました。あゆの会のメンバーと4月18日や11月8日のキャンペーン活動（これは現在も続行中：46回）や県内の講演会活動、また、ロータリークラブとのコラボ事業など、続けるきっかけになりました。特に、発会式前後で、私の地元の隣村の利賀村で、「WFに調査費を村が計上」という新聞報道があり、県議会でも取り上げられましたが、その時に村職員を引率して、清吾先生と釜山の施設研修に同行しました。その際の目的は、利賀村のような人口の少ない地域での装置があるかを調べるものでした。しかしながら、韓国では、人口2-3万人から、30-50万人規模の施設で実施しており、利賀村で使えるものは無く、引率した課長も復命書で残念という報告をして、実施には至りませんでした。しかし、清吾先生はそれから、少ない人口でも使用できる装置の開発に自ら乗り出されました。それが、日大松戸の教室で設置、運転開始、そうして、現在、下仁田町や川崎愛児園での施設フロリデーション装置に繋がっています。



2001年富山むし歯予防フッ素推進市民ネットワーク発会式で、特別講演をいただいた清吾先生

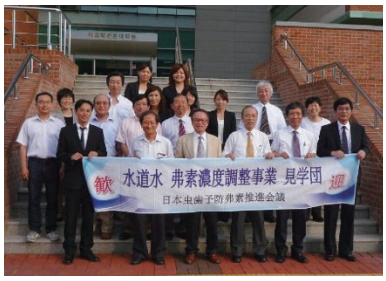
この時のあゆの会の活動は、別の面で思わぬ効果をもたらしました。ロータリークラブでは、世の中に良いことをしよう、という活動がありロータリー財団が補助金を出してくれます。富山県内では、私の周辺の地域ではあゆの会がフッ化物応用の推進の活動を続けていたせいもあり、どこもフッ化物洗口を実施しています。しかし、当時隣の高岡地区では、ほとんど実施していなくて、県が発表するむし歯の数での健康格差が現れてきていました。これを複数のロータリークラブで支援しながら、実施に向けて行こうという事になり、清吾先生の講演会が開かれました。大変、好評で、これが平成28-令和2年度の高岡市小学校フッ化物洗口実施事業（平成30-令和2年の3年計画で全施設実施）に繋がりました。平成28-30年、3年間清吾先生には、講演に来ていただきました。

思い起こせば、フッ化物応用の話を清吾先生がされるときは、テーマが「フッ化物洗口」であっても、「水道水フロリデーション」の話がない講演はありませんでした。すべてこれが基本だと話されました。

山内先生の所で「箱根会議」をした時や、私の実家「権次郎の館」で夜通し語り明かしたときの清吾先生の姿はもう見られません。後に残ったものは、胸に刻まれた清吾先生の訓示を実践に向けて、あきらめないで頑張らねばなりません。それこそ命を懸けて頑張った清吾先生に報いるためにも・・・

アリス・ホロウィッツ親子京都へ

33回富山大会の座長



2010年釜山WF施設研修にて

地方会の後、富山、南砺市「権次郎の館」にて

2015年横須賀基地視察

視察後、
神奈川歯科大での講演

2015年山内会長の分院のある箱根へ「箱根会議」

「何事もいい加減にしない小林先生、安らかに」

NPO法人日本フッ化物むし歯予防協会会長　**荒川 浩久**

小林先生との出会いは1977（昭和52）年の日本口腔衛生学会の時でした。とても真面目で何事にも耳を傾け、おかしいなと思うと、ハイと手を挙げて意見を述べる。見習わなければならない大先輩という印象でした。それからは、皆様と同様に、フッ化物つながりで今日まで師と仰いできました。志半ばで永眠されたことは残念でなりませんが、私たち共同体でフロリデーション実現に向けた努力を継続していきましょう。

日本口腔衛生学会にフッ素研究部会（当初の名称）が設置されたのは榊原幹事長の時でした。当初は新潟大の堀井教授を部会長とし、飯塚、可児、高江洲、岩本、境先生方が委員として活動されていたと思います。間もなくして小林、眞木先生と私が委員となり、1982年に「う蝕予防プログラムのためのフッ化物応用に対する見解：フッ化物応用のすすめ」を発表しました。それが以下です。40年以上経った今でもこの見解は生きています。

歯の健康のためフッ化物の応用を推奨する！

1. フッ素は、歯の健康のため必要であり、歯の形成期および萌出後、さらに生涯を通じて有効である。
2. 歯科保健管理下で行われるフッ化物の応用は安全である。
3. 子ども達のう蝕予防のため、公衆衛生的なフッ化物応用のプログラムは効果的である。
4. フッ化物の応用は国際的に広く奨められている。

その後、境先生を委員長とするフッ化物検討委員会を経て、2001（平成13）年4月～2005（平成 17）年3月まで小林委員長のフッ化物応用委員会で、ご一緒に活動してきました。学会のなかでは、「フッ化物応用委員は研究を行い活動はしないように！」と意見を述べる諸氏もおりましたが、小林先生は「活動あっての研究」という意志を貫きました。委員長時代に、何と言っても「久米島でのフロリデーション実現」に向けて努力された姿は忘れることができません。当時の具志川村での字廻りでの唱導活動（住民が働いている昼を避け、夜に村の小さな集落単位で説明し質問に回答するなど）には心から敬服しました。そして定年される時には「新潟に戻って百姓します」とおっしゃっていましたが、フッ化物推進に向けてのご努力も継続され続けました。川崎での施設内フロリデーションがその一つです。装置が不調の時は新潟から出向き修理するという大変な作業を引き受けてくださいました。これらの活動のほとんどが手弁当であったことも付記します。

写真は、中国某地に歯科健診、フッ化物洗口とシーラントの方法を根付かせることを目的とした国際協力活動の一場面です。リラックスした雰囲気のなかでお一人だけネクタイ姿、いい加減でない小林先生らしい一コマです。亡くなられて1年近くになりますが、野菜は順調に育っていますか？どうぞ安らかにお過ごしください。

「小林清吾先生と黒いスーツケース」

鶴見大学名誉教授　**鶴本 明久**

小林清吾先生といえば、いつも引いておられた黒いスーツケースを思い出す。その中には内外のフッ化物に関する論文、これまでの会議のメモや記録などがビッシリと詰まっていた。とても重いスーツケースである。埼玉県の吉川市で水道水フロリデーション推進のための活動でだいたい月に一度の会議を開いていたが、その時にも勿論小林先生は黒いスーツケースを持参されていた。会議の中で質問などがあると即座に関連する論文や資料をスーツケースから引き出し、丁寧に説明してくれた。また、会議の進行に混乱が生じるとこれまでの会議のメモや会議資料を示し、曖昧な記憶や憶測を避け推進活動を適正に合理的に導いていただいた。黒いスーツケースは小林先生の真面目で厳格な性格の象徴でもあり、水道水フロリデーションへの情熱を表現するものであった。

また、小林先生は人を褒めることが上手であった。私もよく褒められ過ぎて調子良く仕事を進めていたように思う。しかし人の行動をよく分析し、厳しく批判されることもあった。とにかく小林先生は後輩の意見にもよく耳を傾けてくれた。そのようなことで小林先生の周囲は常に賑やかであった。行動目標が明確で、次にやるべきことが共有されていたのだ。例えばフッ化物洗口の50年後の効果を検証するための弥彦村での「成人のむし歯調査」の計画と実行は追いつけないほどに早く、調査をするための組織づくり、調査表の作成など、驚くべきエネルギーで進められた。小林先生は常に走っておられたように思う。今やっていることの結果が見えてくると次の目標が垣間見えて早く到着しようという行動である。

小林先生は基本的にお酒を飲まれなかったが、お酒の席にはよく参加して頂き水道水フロリデーションについて議論していた。その際によく「僕にはあまり時間がないんだ」と話されていた。御自身の年齢や健康問題のことを考慮して発言されていたのかもしれないが、むしろこれは我々に対する叱咤激励であったのではないかと思う。「一体何をやっているのだ。これでは水道水フロリデーションは日本では全く実現しないぞ‥‥」とおしゃっていたのだ。情熱の塊のような小林先生ともう少し一緒に活動を続けたかった。まさかこんなに早く逝去されるとは思わなかった。小林先生から託された使命はただ一つ。日本での水道水フロリデーションを一日も早く実現することである。小林先生には天国から厳しく叱咤激励し続けていただけることをお願いしたい。

「小林清吾先生を偲んで」

NPO日F / 静岡県歯科医師会　榎田 中外

小林先生とのお付き合いは、私が新潟大学歯学部予防歯科学教室に入局してからですので、およそ50年になります。

当時の予防歯科学教室は、堀井欣一教授、境　脩助教授、小林清吾先生を筆頭に

佐久間汐子、小佐々順夫、小黒章、田村卓也、葭内顕史、筒井昭仁、石上和男、滝口徹、野上成樹、小泉信雄など、錚錚たる先生方がおられました。

当時は、外来診療、基礎研究に加え、弥彦小学校など新潟県内のフッ化物洗口普及、及びフロリデーション推進活動、そして新潟県歯科医師会の先生方と設立した「子供の歯を守る会」などの社会活動が、教室挙げて行われていました。

小林先生はその活動の先頭に立ち、とりわけ牧村でのフロリデーション推進活動では精力的に活動されていました。

私はその後、郷里の静岡県牧之原市で開業し、静岡県内の幼・保育園、小中学校でのフッ化物洗口の普及活動を県歯、及び地元歯科医師会と共に行ってきましたが、小林先生には講演会の講師として何度となく静岡に来ていただきました。

1987年に設立した「静岡県子どもの歯を守る会」の発会式では、小林先生が「子どもたちの歯を守るために ―フッ素によるむし歯予防方法―」との演題で記念講演されました。

1996（平成8）年静岡子どもの歯を守る会主催 講演会にて

1994年8月には、小林先生がアメリカのNIH（米国国立衛生研究所）に留学されていた時に、和歌山の野上先生と私で、小林先生を訪ねました。
その際に、アメリカだけでなく世界の水道水フロリデーション推進に尽力されたハーシェル・ホロウイッツ博士夫妻と会食出来たことは、光栄なことであり、今でも鮮明に記憶しております。
3人で飛行機を利用してナイアガラの滝を訪れたことも楽しい思い出です。

1994（平成6）年アメリカにて

2022年7月に新潟大学歯学部同窓会の50周年記念式典があり、その時に小林先生（初代同窓会長）と親しく話をしましたが、それが最後になってしまいました。

学者として、研究者として、教育者として、そして何よりも我が国の「水道水フロリデーション」実現のために全精力を傾けてきた活動家として一生を捧げられた清吾先生は、多くの方々の心に焼き付いています。

NPO日F、フロリデーションファンドが中心になり、我が国の「水道水フロリデーション」実現に向けて今後も活動を続けていくことをお誓いして、清吾先生への追悼文といたします。

2006（平成18）年2月

新潟大学予防歯科

2006（平成18）年

（榎田 中外）

「小林清吾先生に感謝」

石上 和男

小林先生には筆舌に尽くしがたいほどお世話になったが、こんなに早く旅立たれるとは思いもしなかった。「新潟がんセンターに入院するが、検査入院だから心配ご無用」とのメールをいただいたのですっかり安心していた。入院中も携帯電話で何回か連絡をもらっていたが、病室にパソコンを持ち込んでいると勝手に判断していた。ある時ずっと返答を待っていたが一向に返事が来ない。実はそれも当然だと思うことがあとでわかった。骨転移で携帯電話すら持ち上げられないような状態ではパソコンを使うことは不可能だ。このように私はいつも思考が呼ばない「石上くん」なのだ。携帯電話でも良いから小林先生の「話したいこと」をお聞きできていればと、大いに悔やんでいる。

小林先生の思いは、「フロリデーション」と「弥彦村」である。弥彦村民の理解を深めるために、長年実施してきたフッ化物洗口の効果を明らかにすることを試みようということになった。県庁や弥彦村にも働きかけたが理解を得るには時間がかかった。しかし小林先生の情熱で各方面に働きかけたことが功を奏し、実現の運びになった。その内容が添付資料のとおりである。ひとつひとつ科学的根拠を明らかにし事業の推進を図る「唱道者」が小林清吾先生であり、先生の教えに一歩でも近づくことを目指したいと思っている。

小林清吾先生のご冥福をお祈りいたします。

新潟日報 2022年(令和4年)6月20日(月曜日) 11版 社会 26

新潟大、弥彦で追跡調査

フッ化物洗口 成人後も効果

虫歯、最大5.55本減

小児期に虫歯予防としてフッ化物洗口を行った人は、成人後も虫歯の数が少ないとする調査結果を、新潟大などがまとめた。調査は、約30年前に全国に先駆けてフッ化物洗口を始めた弥彦村で、村民を対象に実施。フッ化物洗口を続けた人の虫歯は、何もしていない人より、年代別の平均で最大5・55本少なかった。フッ素の効果に加え、虫歯予防の意識が高まったことも要因とみられる。

調査は、厚生労働省の事業を日本口腔衛生学会が受託し、新大歯学部が実施。2020年10～12月に弥彦村内在住の232人を対象に、治療済みや抜けた歯を含めた虫歯の数を調査し、年代ごとに分析した。

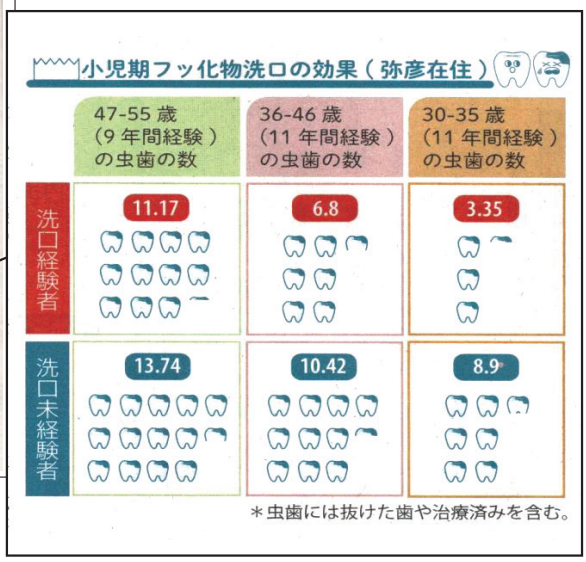
4～14歳の11年間フッ化物洗口をした30～35歳は、虫歯の数が平均3・35本で、転居などで洗口をしなかった村民より5・55本少なかった。同様に11年間した36～46歳の虫歯の数は平均6・8本で、していない村民より3・62本少なかった。

小中学校の9年間フッ化物洗口をした47～55歳は、虫歯の数が平均11・17本で、しない村民より2・57本少なかった。途中で洗口をやめた人は、続けた人に比べて虫歯の数が多い結果となり、フッ化物洗口の効果の減少がうかがえた。調査した新潟大大学院医歯学総合研究科の髙野吉郎教授(46)は「予防効果は予想以上に持続している」と話す。

フッ素は酸への抵抗力を高める効果がある。フッ化物洗口は1970年に弥彦小学校で始まったとされる。2020年度は全国の小中学校など約1万4千施設で実施し、本県では12施設、約1479300人を対象に行っている。実施率は全国が約19%、本県は全国で3番目に高い約76%。

本県は20年度の調査で、12歳児の虫歯本数が21年連続で全国最少となった。髙野教授は「フッ化物洗口で虫歯予防への意識も高くなっているからではないか。歯が生え替わる小児期にフッ素で歯を守り、毎晩時間をかけて歯磨きをする習慣が重要だ」と指摘した。

フッ化物洗口の効果を検証した新潟大の調査＝2020年11月、弥彦村



2022年　新潟日報記事6月20日

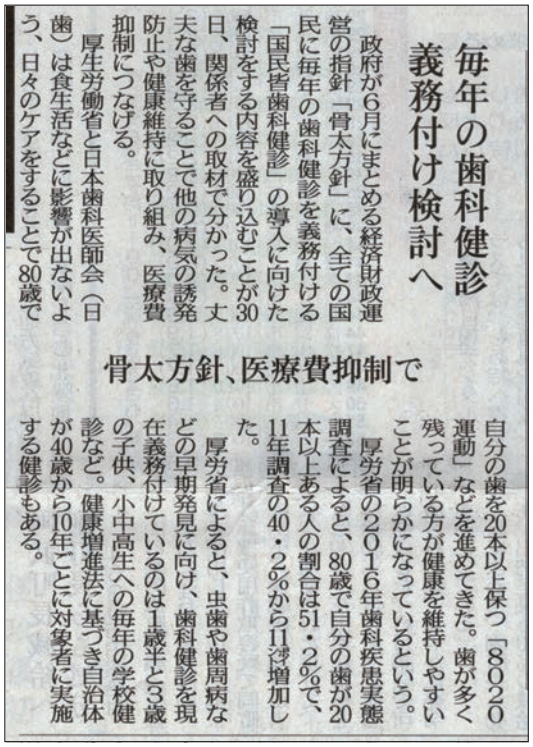
ニックちゃんクイズ

12歳児の虫歯の本数が最も少なかった都道府県はどこかな？

こたえ　新潟県

文部科学省の2020年度調査で、虫歯の本数が0・3本だった新潟県は、全国で最も少なかったんだ。全国1位は21年連続だよ。新潟県では、全国に先駆けて始めた学校でのフッ素のうがいなどが効果を上げてきたんだよ。

新潟日報記事5月20日



毎年の歯科健診 義務付け検討へ

骨太方針、医療費抑制で

政府が6月にまとめる経済財政運営の指針「骨太方針」に、全ての国民に毎年の歯科健診を義務付ける「国民皆歯科健診」の導入に向けた検討をする内容を盛り込むことが30日、関係者への取材で分かった。丈夫な歯を守ることで他の病気の誘発防止や健康維持に取り組み、医療費抑制につなげる。

厚生労働省と日本歯科医師会（日歯）は食生活などに影響が出ないよう、日々のケアをすることで80歳で自分の歯を20本以上保つ「8020運動」などを進めてきた。歯が多く残っている方が健康を維持しやすいことが明らかになっているという。

厚労省の2016年歯科疾患実態調査によると、80歳で自分の歯が20本以上ある人の割合は51・2％で、11年調査の40・2％から11ポイント増加した。

厚労省によると、虫歯や歯周病などの早期発見に向け、歯科健診を現在義務付けているのは1歳半と3歳の子供、小中高生への毎年の学校健診など。健康増進法に基づき自治体が40歳から10年ごとに対象者に実施する健診もある。

新潟日報記事5月31日

（石上 和男）

「小林清吾先生を偲んで」

和歌山市開業　**野上 成樹**

昨年ご逝去される前の8月初旬頃、清吾先生に電話しました。「大阪の学会のシンポジストに名前が載ってるのに出てないの、どうかしたん?」「いやー、いろいろ体調悪くてね、欠席させてもらいました。今日これから病院に検査結果、聞きに行ってきます」と種々雑談したのが最後になってしまいました。その後、奥様に連絡差し上げましたが、本人入院中で体調悪く、電話に出られないとのことで、これが最後の連絡になってしまいました。

私が瀧口先生、小泉先生と共に予防歯科に残ったのが1976年。
清吾先生のご指導の下（私がご指導したこともありますが・・・麻雀ぐらい？）、
・当時（昭和50年代）むし歯の洪水といわれた時代にフッ素

・弥彦小学校でのフッ化物洗口、子供の歯を守る会、フツ全協、フツ予研、日F、NPO日F

・牧村のフッ化物洗口・フロリデーション活動の行き帰りの寄り道、

・清吾先生の学位論文のネズミの母仔の大腿骨のフッ素濃度の測定、

・新潟市上所島、小林清吾邸での麻雀大会、

・夜の新潟探訪、

・清吾先生がNIH（米国）留学中、榎田先生とお邪魔してお世話になりました、

・和歌山へも何度か講演に来て頂いたことも、

・日大松戸の教授になられてからは、私の娘のお世話（娘2人日大松戸無事卒業）、

と思い起こせば、多々本当にお世話になりました。有難うございました。
清吾さんが亡くなられて本当に寂しいです。安らかに、お眠りください。
先般、子ども園、中学校の健診に行ってきました、種々原因はあるでしょうが健康格差を実感。
園長・校長・養教の先生と話しても、この格差是正の最善の策・公衆衛生対策「フロリデーションの実現」は喫緊の課題です。清吾先生、実現するよう、見守ってください。

新潟大学予防歯科学講座　1978（昭和53）年頃

「小林清吾先生を偲んで」

NPO日F / 福島県歯科医師会　**斎藤 慎一**

去る１１月１３日に小林清吾先生がお亡くなりになったとの連絡を受けて妻共々深い悲しみを禁じえませんでした。体調が悪いとは聞いておりましたが療養に専念されておられるとばかり思っておりました。真に残念でなりません。

小林先生との出会いは、私が昭和５３年に新潟大学予防歯科学教室に入局した時から始まります。先生は後輩である私にも「さん」付けで呼んでくれましたし、先輩風を吹かすことは決してありませんでした。誠実そのもので癒しの方でした。当時の教室は教室員の年齢もすこぶる若くてフロリデーションの実現を目指し活気あふれていましたし、下宿にいるより教室にいる時間のほうが長かった覚えがあります。

特に小林先生のフィールドであった牧村での健診には思い出があります。

私は卒業したばかりで知識に乏しかったのですが、先生はう蝕であるか、う蝕でないか、結構悩まれるんですね。う蝕の判定は難しいものだと思いました。

また当時の牧村の生徒が一人でたくさんう蝕を持っているのでDMF指数が下がらないと残念そうにしておられました。牧村のう蝕を減らそうと一生懸命でした。牧村での大きな成果は先生の努力なくしては実現できなったでしょう。

私が学校歯科医をしている小学校では2004年からのフッ化物洗口の開始にあたって先生からアドバイスを沢山いただきました。福島県では現在47市町村でフッ化物洗口が実施されています。先生と一緒だった予防歯科での濃密な4年間があったればこその成果ではないでしょうか。

引き出しからセピア色の写真が出てきました。歯学部付属病院の駐車場で撮った写真で私の入局直後です。左から２人目が小林先生です。皆さん若いですね。

最期に先生のご冥福を祈りながらお別れの言葉とさせていただきます。

歯学部付属病院の駐車場　左から２人目が小林先生

「小林清吾先生を偲んで」

島根県松江市　**深田 孝宏**

予防歯科学は学３で講義があり確かポリクリの学４の実習にて、予防歯科のライターの先生の車に分乗して新潟県弥彦村のフッ化物洗口実施の小学6年生の学校検診を体験しました。ライターの先生からは、「この学校の6年生はDMFTが1本だからね」ということで昭和57年の洗口地区の白い歯が印象に残っています。卒業後は地元の口腔外科に在籍後開業、しばらくは予防との縁はありませんでした。開業前に大学から派遣された隠岐の島で夏休み期間にまとめて小学生の歯科治療（主に乳歯）を担うことになりましたが、口腔環境は想像通りでした。

平成7年ごろから、県歯の役員（学校歯科）を担うことになり、県庁に歯科医師として赴任された梶浦先生と口腔外科同門会が協力してのフッ化物洗口普及啓発が始まりました。当時から小林清吾先生始め大学の同級生、先輩方が来県され県内の関係者に向けて「むし歯の予防歯科」を指導されました。当時の島根県は「フッ素鎖国？」状況での普及でしたが、清吾先生を始めとした講師陣の知性と熱意が今日の普及に至っています。

最後になりますがお元気でおられたときの清吾先生の生き方は、十分肌で感じております。今後も予防歯科の普及に尽力する私達を見守ってください。

「小林先生と共に下仁田町で水道水フロリデーション実施をめざした思い出」

公益社団法人富岡甘楽歯科医師会 **萩原 吉則**

私は、昭和57年に新潟大学歯学部を卒業し、約3年間の勤務医生活を経て、昭和60年に故郷の甘楽町で萩原歯科医院を開業しました。昭和61年には、甘楽町内の幼稚園4施設でフッ化物洗口が始まり、翌年には小学校でも開始することが内定しました。ところが、そのころ群馬県内の他地区でフッ化物洗口反対運動が発生し、当時の県歯科医師会の不適切な対応もあり、甘楽町もかなり厳しい状況に追い込まれました。そこで、支援をお願いしたのが新潟大学予防歯科でした。ちょうどそのころ、小林先生が長崎大学から戻ってきておられ、いろいろ教えていただきました。

それ以後、富岡甘楽地区は、小林先生を中心に日本口腔衛生学会の多くの先生方にご支援をいただくことができました。行政、住民、富岡甘楽歯科医師会のいずれにとっても、幸運なことだったと思います。これもひとえに小林先生の人脈によるところが大きかったと思います。

その後、富岡甘楽歯科医師会管内の富岡市、下仁田町、南牧村、甘楽町では、幼稚園、保育園でフッ化物洗口が始まり、乳歯のむし歯予防対策としてフッ化物歯面塗布が市町村の事業として普及しました。富岡市市制施行50周年記念事業として、歯科保健シンポジウムが開催されるなど、歯科保健に対する評価が高まっていきました。

平成14年度に、下仁田町で水道水フロリデーションをめざすチャンスが来ました。町が「健康しもにた21」計画を策定しました。その中の「8020推進基盤整備事業」に対して、平成15年度から18年度まで４年連続で、8020推進財団から歯科保健活動助成が交付されました。事業の目的は、「フロリデーションが受け入れられる環境を整備する」ことです。健康づくり推進協議会の専門部会として「健康しもにた２１『8020』推進委員会」が組織されました。平成16年３月に、委員会は「フロリデーションが、有効性、安全性、実用性において、各種フッ化物応用の中で最も優れた公衆衛生的な方法である」ことと、「実施にあたっては、住民に科学的根拠に基づく正確な情報を十分に提供し、住民の理解協力を得る必要がある」ことの２点を趣旨とする提言を提出しました。

健康しもにた２１「８０２０」推進委員会の様子

成16年３月に、委員会は「フロリデーションが、有効性、安全性、実用性において、各種フッ化物応用の中で最も優れた公衆衛生的な方法である」ことと、「実施にあたっては、住民に科学的根拠に基づく正確な情報を十分に提供し、住民の理解協力を得る必要がある」ことの２点を趣旨とする提言を提出しました。
平成16年度には、住民の理解協力を得るため媒体として、日本口腔衛生学会監修のパンフレットが完成し、下仁田町の全世帯に配布されました。

平成17年4月には、フロリデーション推進にかかわってきた歯科医師、薬剤師、歯科衛生士の専門職を中心に、「下仁田町フロリデーション推進会議」が発足し、歯科医師会と連携しながら活動を開始しました。7月には、小林先生のご尽力により、厚生労働科学研究班の技術支援を受け、「フロリデーションモデル装置」がふれあいセンターに設置されました。

平成17年7月24日(日)
町長など関係者 約40名が参加して行われたモデル装置の完成報告会の記念写真

フロリデーション推進会議が提出した「フロリデーションの普及をめざした啓発活動の推進に関する陳情書」が、平成18年３月の下仁田町議会で趣旨採択になりました。そこで、６月に歯科医師会とフロリデーション推進会議の連名で要望書を提出し、議会、町職員、保健推進員の研修会などを開催しました。

平成19年2月、フロリデーション推進会議と富岡甘楽歯科医師会は、「フロリデーションの早期実施を求める陳情書」を町議会に提出しました。3月初旬に、フロリデーションの実施を求める町民266名が連名で、町長と議長宛に要望書を自主的に提出し、陳情書の採択を求める活動を始めました。陳情書は3月議会で継続審議になり、6月議会で審議されなかったため採択に至りませんでした。小林先生を中心に日本口腔衛生学会の先生方や歯科医師会関係者などから、多大なご支援をいただいたにもかかわらず、結果が出せなかったことは今でも心残りです。小林先生には、35年以上にわたり、ご支援いただき心から感謝しています。最後にお会いした時、「弥彦村でフロリデーションをめざそうと思う」と笑顔で語っていた先生の顔が忘れられません。これから日本のどこかでフロリデーションが実現して、小林先生の夢がかなえばいいと心から願っています。

平成17年11月6日(日)
下仁田町の健康祭に参加してフロリデーション啓発をする小林先生
参加者約500人

（萩原 吉則）

「小林清吾先生を偲んで」

安藤 雄一

小林清吾先生とは新潟大学歯学部予防歯科学教室で10年余《1987(昭和62)年11月～1998(平成10)年3月》、一緒に仕事しました。

学生時代からもお世話になり、1982(昭和57)年には長崎豪雨の直後に(福岡で行われた歯学体に参加後)に大学同級生の深田孝宏君とお邪魔し、パンツ干し洗濯ロープが張られた医局に泊めていただいたり、新潟県人の私には物珍しかった焼酎のキープボトルがズラリと並ぶ飲み屋でご馳走になったりと、大変な歓待を受けました。

新潟大予防歯科学教室で御一緒した10年余は様々なことがありましたが、水道水フロリデーションに関していえば、もっと踏み込んで議論しておくべきだったという後悔めいた思いもあります。もちろんフロリデーションについて色々と話をしましたが、当時はフッ化物洗口の普及も進んでいませんでしたし、目の前のことへの対応に必死で、余裕がなかったのかもしれません。

この10年余で印象深かったことが2つあります。

1つ目は他愛ない話で、小林先生が古巣に戻られて10ヶ月後に行われた1988(昭和63)年ソウル五輪・陸上男子100m世紀の対決「ベン・ジョンソン対カール・ルイス」に関するものです。当時の盛り上がりは大変なもので、教室員同士で百円くらいの賭けをしていて、ルイスに賭けた小林先生は負け、ジョンソンに賭けた私の勝ちでした。が、数日後に薬物使用でベン・ジョンソンが失格になった後、「安藤さん…」と深刻な面持ちで話を切り出され、反則なのだから賭けは不成立だ、と小林先生。私は唖然としつつも「反則だろうが何だろうが賭けは賭け、成立する」と反論を試みましたが、小林先生の「正義感」の前には無力で、結局、賭けは不成立に終わったように記憶しています。

2つ目はシリアスな話で教授選考を巡るものです。結果は残念なものでしたが、その後の宮崎・新任教授を迎える小林先生の紳士的な振る舞いは強く心に残っています。当時、新潟県の歯科保健が何事もなかったかのように粛々とすすんだのは小林先生のお陰だったと思います。小林先生御自身も、いま自分が人間として試されている、といった趣旨のことを口にされていました。失意のなか、かように役割を果たすことは、なかなかできることではありません。小林先生の「徳」が成せる業だったというべきでしょう。

その後、小林先生は日大松戸に教授として赴任され、私は国立保健医療科学院に赴き、フロリデーション装置等の技術的な面や反対運動対策などで一緒にお仕事しました。開発されたフロリデーション装置は、まだ日の目を見ていませんが、何とかこの装置開発が実を結ぶよう、フロリデーション実現に向けて考え、動くことが、小林先生への何よりの供養になると思う今日この頃です。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

「小林清吾先生を偲んで」

新潟大学歯学部13期生　**川崎 浩二**

1. 出会い

小林清吾先生との出会いは、私が新潟大学歯学部に入学した1977（昭和52）年でした。「社歯研（社会歯科医学研究会）」に入部したのですが、そのOBが予防歯科学教室に何名かいらっしゃったことから、予防歯科によくお邪魔するようになりました。1期生の清吾先生は大先輩なので、その頃は親密にお話することはありませんでした。

2. 運命の歯車

1982（昭和57）年4月に創設された長崎大学歯学部予防歯科講座に清吾先生が助教授として赴任されることになり、その直前に翌年卒業予定の私に「川崎君も来年長崎に来ませんか？」というお言葉を頂きました。今から思えばリップサービスだったのでしょうが、実はその言葉がきっかけとなり、同年長崎大水害の約1か月後に長崎を訪問して、高木興氏教授にもお会いしてお話を伺いました。そして翌年4月から、高木教授、小林助教授、新潟から小林先生と共に赴任された中村宗達講師の下で働くことになり、運命の歯車が回り始めました。

3. 思い出・学んだこと

長崎大学歯学部1期生は1980（昭和55）年入学で1983（昭和58）年から予防歯科の講義と実習が始まることから、教授以下4名で赴任当初から暗中模索状態で創設準備を行ったことがとても懐かしい思い出です。

清吾先生から学んだことは、教育者としてのあり方です。教科書や既存の講義内容を単に教えるというのではなく、ご自分が実際にかかわったフィールド研究とその結果と社会的効果を紹介しながら、なぜ「予防」が最も重要なのか？社会でその予防法を勧めようとしてもなぜ簡単には進まないのか？推進の障害はなぜ生まれてくるのか？それを克服するために専門家は何をなすべきか等々を熱心に語られ、学生を引き込んでいくところです。更に社会に対して自ら先頭に立って活動していく姿勢を学生に見せる。その熱心で真摯で私利私欲のない言葉と行動こそが、地元で積極的に社会予防活動のリーダーとして活躍している何人もの長崎大学歯学部卒業生を輩出しているのです。中国の唐時代の名医孫思の著書『千金方』に書かれている「上医は国をいやし、中医は人をいやし、下医は病をいやす。」の上医を育てる教育者であったのだなあと思います。

清吾先生は実に謙虚な方でした。私たち下の者や学生に対しても常に「さん」づけで名前を呼んでくださり、丁寧な言葉遣いで接して下さいました。まさに「実るほど頭を垂れる稲穂かな」です。

4. 感謝

清吾先生の「ぶれない生き方」、「誠実な生き方」を尊敬しています。そのような先生と時間を共有させていただいたことに感謝です。今でも「川崎さーん、土曜日だからボーリングに行きませんか？」という声が聞こえてきそうです。またいつかどこかでお会いしましょう。

2000年長崎市

2000年長崎

2015年長崎県歯科医師会館

「私にとっての小林先生との思い出と宝物」

新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔保健学分野　**葭原 明弘**

小林先生がお体を悪くされたと伺ってからあまりにも早い御逝去に心から深い悲しみを覚えます。今回、長年にわたる活動の中で小林先生との協働の一端をお話ししたいと思います。

まず、新潟県が日本一むし歯の少ない県に位置づけられたことに関して述べたいと思います。20年以上前になりますが、その当時、子供の歯を守る会、行政、歯科医師会が連携し全県的にフッ化物洗口の普及に取り組んできました。そして、その後のむし歯予防戦略として私どもは小林先生より「ターゲットシーラント」を御指導いただきました。全ての小窩裂溝にシーラントを填塞するのではなく、よりう蝕リスクの高い歯を選択するというプログラムです。今でこそ、疾患予防に対してはポピュレーションアプローチとハイリスクアプローチの組み合わせが重要であることは常識となっていますが、その当時はとても画期的でした。その後、小林先生の御指導の下、弥彦小学校で基礎的な研究、隣接する旧岩室村でモデル事業、さらには上越歯科医師会と連携した地域的なシステムの運用・評価を踏まえ、2000（平成12）年、公診連携（施設でのフッ化物洗口＋ターゲットシーラントの選出と歯科医院への予防勧奨）による8020育成事業として全県的に普及させることができました。これに加え1980年代に構築したデータベースシステムに始まる精度管理システムを組み合わせ事業評価も行ってきました。その成果が20年以上にわたる日本一むし歯の少ない県の実現につながりました。本当に小林先生には感謝しています。

次に、フロリデーションについて述べたいと思います。フロリデーションが公衆衛生学的に重要である点は疑う余地もありません。私どもはまず、新潟県内で障害者施設を対象とした施設内フロリデーションの実施を検討しました。いくつかの候補地の選定も行い実施に向け準備を進めましたが残念ながら実施には至りませんでした。その後2021（令和3）年、コロナ禍ではありましたが、フッ化物洗口実施50周年に合わせ「むし歯予防全国大会in新潟」を開催しました。その中で「30年後のあるべき姿と今後の取り組みの方向性」と題しパネルディスカッションを実施しました。フロリデーションについてもテーマにあげ、弥彦宣言を採択しました。本宣言の採択に当たっても小林先生からご指導をいただきました。

これまでの長い活動の中でいろいろな場面で小林先生から多くの叱咤激励をいただきました。そのいずれもが私にとってのかけがえのない宝物となっています。

医療法人社団ひかり エース歯科　**須藤 明子**

清吾先生が初めて私たち新潟大学歯学部18期の学部4年生に講義をしてくださったのは、予防歯科臨床実習だったと記憶しています。Deanのグラフを示しながら、エネルギッシュに、笑顔で話していらっしゃいました。1期の大先輩には、素晴らしい方々が活躍されていると、雲の上を仰ぐ思いでした。

それ以来、先生のFluoridationに対する熱いメッセージは続きました。私が予防歯科学教室の門を叩いたのも、先生をはじめ当時医局にいらした先生方の地域歯科保健への情熱を伺い、自分も取り組んでみたいと思ったからでした。

私が入局した頃の忘年会の写真や、医局旅行の写真を改めて見直すと、先生方の笑顔が溢れています。しかし、当時フッ化物利用はまだまだ認知されていませんでした。新潟大学予防歯科学教室は歯科界におけるアウトローの立場だと、私は感じていました。

逆境の中においても、先生はいつも内面から溢れる熱いエネルギーで私たちを導いてくださいました。毎年年賀状に『Fluoridation yes』と自筆で書かれていたことは、私にとっての年始の抱負の確認となっていました。

今やフッ化物をきちんと臨床応用できないような歯科医は、時代遅れとなりました。Fluoridationは叶いませんでしたが、清吾先生のおかげで、本当に多くの地域で子どもたちがう蝕から救われたことは紛れもない事実です。私たちは地域歯科保健においてフッ化物推進を継続できるよう、遺志を引き継いで参ります。どうぞ見守っていてくださいますように。ご冥福をお祈り申し上げます。

「松原（小林）清吾先生を偲んで」

有田 信一

私が最後に松原（小林）清吾先生と話したのは、亡くなられる1か月ぐらい前でした。街を歩いていると突然、携帯の音が鳴りました。電話の主は清吾先生でした。従来から、清吾先生からは思いがけない時に電話がありました。

それが、時には留学先のアメリカからだったり、日大松戸の大学からだったり、内容はフッ化物利用のむし歯予防に関することがほとんどでした。例えば、日本におけるフッ化物への反対運動に対してだったり、某学会のフッ化物洗口に対する消極的な対応についての相談などです。

今回の電話の内容は「支援していた村長が当選し、村のフロリデーション事業は今後良い方向に向かうだろう」と言う報告と「村長当選の祝賀会で水やノンアルコール飲料をたくさん飲んでしまい、頻尿が悪化し、前立腺の手術を受けることになった」というものでした。清吾先生の声はいつもと同じく、明るく、エネルギッシュでした。私の周りにも前立腺の手術を受けた友人が少なからず居たので、清吾先生に「大丈夫ですよ。○○先生も△△先生も今は元気に診療されていますよ」と答えて、電話を切ったのです。それが約1か月過ぎに、訃報を聞くとは！！

清吾先生と最初に出会ったのは、1982（昭和57）年に清吾先生が新潟大学予防歯科から長崎大学予防歯科の助教授（准教授）として、赴任された時です。私は当時、角町正勝先生、松尾敏信先生らと一緒に「長崎県子どもの歯を守る会」の一員として、県下におけるフッ化物洗口の普及啓発活動を行っている時期でした。長崎に赴任後も長崎大学で教育活動を行うとともに、私たち長崎県子どもの歯を守る会や長崎県下のフッ化物の普及啓発活動にも、エネルギッシュに関わってくれました。おかげで、長崎県は保育園、幼稚園そして小中学校、すべてでフッ化物洗口が実施されています。

清吾先生の功績は、長崎県下のフッ化物の普及啓発の大きな力となったことに加えて、長崎大学での予防歯科の教育活動を通じ、公衆衛生に興味を持つ学生を多く育てたことです。そして、今、その教え子たちが「健康はすべての住民のため」という理念で、長崎県、あるいは全国各地で活躍しています。

清吾先生が大学人を終え、新潟に帰られた後に、清吾先生と一緒にした仕事があります。（株）アイ・メディカルから依頼された「子どもの歯を守るむし歯予防 小児歯科」というリーフレットつくりです。これが最後の共同作業となってしまいました。このリーフレットでも清吾先生は清吾先生らしく、地域のシステムが子どもたちのむし歯を守ることを解説しています。

最後の最後まで、Health for Allに向けて、実践されてきた歯科医師が清吾先生でした。清吾先生のいつも清々しい立ち振る舞いは私の脳裏の奥深くに刻まれています。

「小林清吾先生のこと」

田口 円裕

昨年の春以降、お身体の調子が悪く、療養されていることを耳にし、先生とはLINEで連絡をとっておりました。2023年11月12日に新潟のご自宅で療養されている小林先生を訪ねました。あまりお話しはできませんでしたが、穏やかなまなざしと柔和な笑顔は普段通りで、またの訪問を約束し、お別れしました。まさかそれが最後の別れになるとは思いもせずに。

翌々日の火曜日の朝、奥様から訃報の知らせをいただきました。あまりにも突然の訃報に驚くより、信じられない気持ちで、新潟に向かいました。先生は、前回の訪問時と変わらない穏やかなまなざしと柔和な笑顔でした。先生が亡くなったことは私も妻も未だに信じられない気持ちです。

1997年10月でした。出向先の山形から厚生省に戻った際に、たまたま宿舎が松戸になり、その当時日大松戸歯学部の教授として新潟大学から赴任してきた小林先生と再会を果たしました。元々、長崎大学時代に小林先生と私の妻が一緒に仕事をしていたこともあり、懇意にさせていただいていましたが、松戸での再開以来、公私にわたり、言葉では語りつくせないほど、大変お世話になりました。

仕事面では大学教授と行政マンの関係でしたので、先生からは歯科保健のあるべき姿やその達成のための方法論、学術的なアドバイスを数多くいただきました。特にフッ化物応用に関しては、国の研究や施策を行う上で、学術的な面や地域で実践する場合の課題など、多くのご支援をいただきました。私的な部分でも、夫婦共々、食事をしたり、旅行に行ったり、本当に楽しい時間を過ごさせていただきました。先生からは、「何をやっても批判されるのだから、あなたの心が正しいと思うことをしなさい。」と言われ続けてきたように思います。また、そのことが私の行政時代における仕事の進め方の道標となっていたように思います。

「わが国におけるフロリデーションの実現」に向け、生涯をかけた研究を実践してきたのは周知のことであり、その熱意はすさまじく、「正しいと思ったことは一途に頑張るという姿勢を貫き通す」という研究者としての姿勢を貫き通した人生であったと思います。今後、わが国でフッ化物応用を推進していく中で困難に遭遇した時、多くの人が、小林先生の存在の大きさや有難さを痛感するのだと思います。

私の生涯を通じての恩師である髙木興氏教授（元長崎大学歯学部予防歯科学講座教授 2000年6月逝去）が、小林先生のことを、「吾は清しの人だから」と言われておりました。まさにその通りの生き方であったと思います。生涯を通じて、誇り高く自分の思いに忠実で、そしていつも周りを明るくさせてくれた先生に、「もう少し、できることを精一杯頑張ってみます。」という言葉をお返しし、残りの人生を少しでも「清けく」生きていこうと思います。

ここに、あらためて小林清吾先生に深甚なる感謝を申し上げ、先生のご冥福をお祈り申し上げます。

「小林先生との歩み」

加藤 尊巳

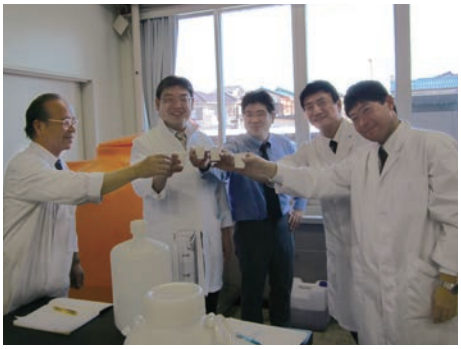
私と小林清吾先生との最初の出会いは、2010（平成22）年頃だと思いますが、私が川崎市歯科医師会（川歯）の地域保健委員会に所属していた時、市内の保育園のフッ化物洗口の普及のため、フッ化物洗口の講演会の講師を、日本大学松戸歯学部（日大松戸）教授であった小林先生にお願いした時でした。日大松戸は私の母校でもあります。その時に、大学に「タロウ：フロリデーション（WF）水作製装置」があり、専用のサーバーで学生が自由に試飲しているということで、そこで「タロウ」と出会うことになります。

その後、川歯会館にもWF水サーバーを設置し会員が試飲できるようにしたいと小林先生に相談したところ、WF水の手作りでの作製法を田口千恵子先生とともに教えて頂き、川歯会館に手作りのWF水サーバーを設置することができました。また、川崎市のお口の健康フェアでも、このWF水サーバーを利用し市民に試飲をして頂き、小林先生には市民にWFの説明をして頂きました。会員にもWFの講演を多数して頂き、これらの取り組みの結果、会員の9割以上にWFを周知することができました。この時期に、「タロウ」が大学で管理できなくなることを小林先生からお聞きし、川歯会館に「タロウ」を設置できないか当時の川歯役員であった佐藤先生、川越先生に相談し、WFファンドにもご協力を得ながら川歯に働きかけましたが設置ができず、「タロウ」を佐藤先生の診療所倉庫に保管しつつ、他の受け入れ先を探しましたが見つからず、小林先生と相談の上、「タロウ」は処分となりました。しかし、その後、小林先生と川越先生のご尽力と川崎愛児園（児童養護施設）のご協力により、新しいWF水作製装置を川崎愛児園に設置することができ、「タロウ」なき後、現在に続いています。

最近では、田口先生が、神奈川県歯科医師会（県歯）の神奈川県歯科保健賞研究奨励金事業として、川崎愛児園の入所児童のWF意識調査をされ、貴重な報告書を提出して頂きました。現在、私は県歯で、県の歯科保健条例改正と計画に関わっており、県で始めてとなる学校でのフッ化物洗口モデル事業を行政と検討しています。フッ化物洗口事業が推進する中、田口先生の研究が県でのWFの取り組みの切り口になればと考えています。

私の二人の娘は日大松戸の学生で、生徒会長の次女は、今年の学園祭でWF水の試飲ブースの設置を企画しています。これは子への継承であり感慨深いものがあります。以前、娘達と小林先生の所へ苺狩りに行った時に、歯科に興味がなかった娘達に、小林先生が、将来の選択として、歯科の社会的役割とやりがいなどをお話され、このことが、娘達の将来の選択に大きく影響したと考えます。小林先生は、健康社会にはWFがいかに重要で推進する上でどんな困難にも屈せず諦めないことを教えてくれました。これからもWFの取り組みを発展させたいので、小林先生、どうか天から見守っていてください。

タロウ



始めてのWF水作製実習

日大松戸歯学部　**神庭 仁**

小林清吾先生ご逝去に接し謹んでお悔やみ申し上げます。小林先生との出会いは、私が大学一年生の頃でした。当時、小林先生は私の母校である日本大学松戸歯学部の衛生の教授でした。大学一年の頃に配属という少人数の授業で衛生を選択したことがきっかけで名前を覚えていただきました。大して取り柄がなく学業優秀と言えない私でしたが、私のことを気にかけてくださったことを今でも覚えています。なかなか思い通りにいかない時も相談者として一緒に考えてくださいましたし、成功した時は喜んでくださいました。配属の関係で小林先生と下仁田（群馬県）で行われた健康まつりにも参加したこともありました。歯科学生や国民に予防歯科の大切さを教えていきたいという小林先生の熱いお気持ちがありました。

特に小林先生のことで覚えていることは利他の精神を惜しまないことです。相手に寄り添う気持ちを忘れず相手の幸せを願う気持ちが伝わりました。自分もこういう気持ちを忘れずにありたいと思ったものでした。また医局にご挨拶するときも、必ず気さくに応じていただき、心温かい先生だと感銘を受けました。大学卒業後にもむし歯予防の講演にお誘いいただいたり、先生の故郷新潟へ伺いご一緒したこともありました。当時、教授をご退官されていらっしゃいましたが、むし歯予防に対する熱意は強く私に語りかけてくれたことを覚えています。このように大学在学中だけでなく卒業後も小林先生とお会いすることができたご縁にとても感謝しています。

最後に小林先生とお会いしたのが、お亡くなりになる一年前の秋でした。普段と変わらないお元気な小林先生だったため、またお会いできると思いお別れしたのですが、まさかあれが最後になるとは思いませんでした。大阪歯科万博に行きたいと希望を語っていましたし、まだまだやりたいことがたくさんあったことと思います。訃報の知らせを聞いたときは残念でした。小林先生との多くの思い出が頭をよぎりました。今、私は日々診療しておりますが、小林先生から学んだことを胸に刻み自分の人生経験に活かせるようにと思います。

末筆ながら、心よりお悔やみ申し上げます。むし歯予防に一生懸命な先生でしたが安らかにお眠りください。生前に怒られたこともありました。申し訳ありませんでした。天国から温かい眼差しで見守ってください。小林先生の笑顔を見ることができないこと、「神庭くん」の声が聞くことができないことが残念です。辛い時に遭遇した時は小林先生のことを思い出して頑張ろうと思います。本当にありがとうございました。

マツオ歯科医院　**松尾 剛**

このたびは、松原（小林）清吾先生の突然の訃報に接し、深い悲しみと喪失感に包まれております。ここに謹んで哀悼の意を表し、心よりお悔やみ申し上げます。

清吾先生は私がお会いした時から、歯科公衆衛生に真っ直ぐな方で、その信念は全くブレることがなく、多くのことを学ばせていただきました。その実践に向かう中で多くの困難に立ち向かう姿を、近くではありませんでしたが拝見しており、その姿にいつも心を打たれておりました。

先生はいつも周囲の方々に対して親切で、人前でお話をされるときはいつもユーモアを交え、場を和ませつつお話をされていました。そしていつも全力で歯科公衆衛生に取り組んでいらっしゃいました。

新潟大学、長崎大学、日本大学松戸歯学部で教鞭をとりながら、世界中の学者との交流の中で、まさに公衆衛生を体現されていらっしゃいました。予防歯科・歯科公衆衛生学分野における清吾先生の貢献は計り知れません。清吾先生は、日本大学松戸歯学部・予防歯科学分野の教授として、数多くの学生を指導し、その熱心な指導は多くの当時の学生の心に今も刻まれていると思います。また先生の活動は国際的にも高く評価されており、多くの研究実績もあげております。特に、水道水フロリデーションの普及に人生をかけ、その重要性と効果について広く訴え続けていらっしゃいました。

水道水フロリデーションは、清吾先生の生涯にわたる情熱と尽力をかけたものでした。先生は、その普及のために数々の講演や執筆を行い、政策の提言を続けてきました。彼の努力の結果、多くの方々が水道水フロリデーションを学び、その普及に向けてのバトンを引き継いでおります。先生のご活躍は、未来の世代にわたって恩恵をもたらし続けることでしょう。

私が一緒に過ごした時間は、決して長くはありませんでしたが、それでも今、振り返ってみると、先生が熱く予防歯科や歯科公衆衛生を語る姿が鮮やかに蘇ります。先生の予防歯科・歯科公衆衛生にかける情熱は、これからも大きな励みとなります。

先生の突然の旅立ちは、私たちにとってあまりに早く、あまりに悲しい出来事です。しかしながら、先生が私たちに残してくれた多くの教えや思い出は、私たちの心の中で永遠に生き続けることでしょう。先生の笑顔や熱い言葉が、これからも私たちの背中を押してくれることを信じています。

ここに改めて、松原（小林）清吾先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。そして、先生のご家族の皆様に対しましても、深い哀悼の意を表します。

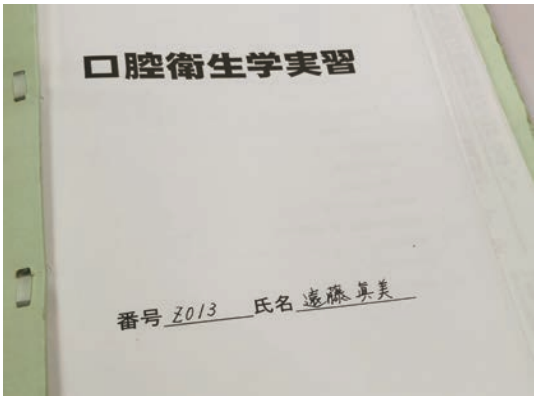
清吾先生、どうか安らかにお眠りください。

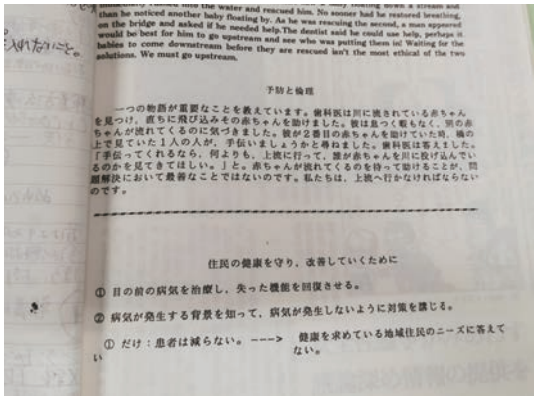
「着火してくださった歯科医師としての情熱の炎を次世代につなぎたい」

日本大学松戸歯学部　**遠藤 眞美**

清吾先生との出会いは大学4年生の口腔衛生学の講義です。学生が講義を通して，教授と出会うことは至極当然なことだと思われることでしょう。しかし，私にとって学生時代に清吾先生と出会わなければ，おそらく，現在のような想いで歯科医師人生を過ごしていなかったと断言できるほど特別な出会いでした。

「人が最期まで食べたいものが食べられること，ずっと笑っていられるように何かしたい」と自分なりの希望する歯科医師像を描いて入学してきたものの，学年が上がるごとに“歯科医師は病気の治し屋”なのかと不安になっていた4年生。その頃に始まった口腔衛生学の講義で，健康というキーワードに対して清吾先生ご自身の信念を学生に熱く語る姿，そして，“Going upstream,”の説明があった後に出された「我が国の歯科保健対策の“上流”において最も不足している点」という課題レポートに対して返してくださったコメントを通して，私は本当の意味での歯学部学生になれたと思います。当時の私は，この課題をきっかけに，このレポートと「歯科医師として患者さんが健康になることをお手伝いできるのか？」という質問を書いたノートを手に部活動以外の用事で初めて医局という場所のドアをノックしました。すると，清吾先生は，「なぜ，そう思ったのか？」「これから何を具体的にしていかなければならないのか？」と，学生で知識も実践もない私にディスカッションしてくださいました。ある時は，偶然，お部屋にいた宮崎の山下文夫先生もご一緒してくださり，実際の現場を体験してみたらと日Fに所属されている全国の先生方をご紹介いただき，お邪魔しました。先生方とお会いして感じた気持ちをまとめてから医局に伺うと，またもやディスカッションの時間をさいてくださいました。そのプロセスの中で，私の理想の歯科医師像への情熱に小さな火がともり，やがて炎へと変化していきました。今も，ボロボロになっている当時の口腔衛生学のレポートや清吾先生とディスカッションした時のノートは私の宝物で，目標を見失いそうになった時に見ては自分を鼓舞しています。





5年生の夏休みにはアメリカのNIHを含めたウォーターフロリデーションの研修，大学院は障害者歯科学を専攻したのですが研究のいろはを教えていただき，平成23年度に大会長をおつとめになった第60回口腔衛生学会の若手シンポジストとして初めて学会で登壇する機会をくださいました。偶然ではありましたが，大学院修了後から私のライフワークとなっているトンガ王国での国際歯科保健協力活動を15年以上，ご一緒させていただきました。現在，トンガ王国では全小学校でフッ化物洗口が実施され，永久歯のう蝕予防が実現され，2023年にWHOからオーラルヘルスで初めてアワードを受賞しています。上水道完備が難しいだけでなく硬水なので上水道が完備されてもフッ化物の濃度調整は至極難しいトンガ王国でのフッ化物洗口実施は最善の公衆衛生的なう蝕予防方法の選択であったと改めて教えてくれています。この活動には、南太平洋医療隊の河村康二先生，サユリ先生の功績は勿論ですが，清吾先生の学術支援と人脈による海外からのサポートも多きな力であったことは間違いないと思います。細かいことは割愛せざる負えませんが，年齢，性別，職種，国籍，生活環境，経済力や文化の異なる方々と協力しながらひとつの活動を実現・定着するには，お互いを尊重しながら，誠実にじっくりと腹を割って各人が正義感をもって真摯に実践・語り合う時間を軽視せずにみんなで道を決めることで遠回りのように見えても実は成功する道をみんなが知らず知らずに歩んでいるのだなと身をもって教えてくださいました。

清吾先生には，感謝という言葉では表せないほど感謝しています。「眞美さん，やだなぁ〜、もっと自信を持って」と落ち込んでいるといつも笑顔で励ましてくださる先生の声は今も私のパワーの源です。そして，自分に直接，関係のないことであっても誠実ではないことを知ると歯が割れるほどかみしめて，本当に歯が割れてしまった清吾先生。その人間らしいところを学生だろうが，トンガ王国の事業で出会った国の偉い人だろうが変わらず見せてしまう清吾先生。常に，奥様をはじめとする奥様を大切にしていてご家族のお話をすると笑顔がますます笑顔になる清吾先生。それが，私の人生の恩師である清吾先生です。歯科医師として，教育者として，研究者として，というよりも人としてどう生きるか，自分なりの信念や正義ともいえる倫理観の礎のもとについた歯科医師としての情熱の火は清吾先生との出会いから始まり，歯科医師となってからもご一緒できたことで炎となって一度も消えることなく現在に至っています。

もっともっと，清吾先生との出会いが私の人生を豊かにしてくださったエピソードはたくさんありますが，まずは大学の教員として清吾先生を目標に歯科医療者としての火のつけ方のわからない学生さんたちと一緒に火起こしのできる教員になれるように精進してくきたいと思いますので，どうぞ見守っていてください。

本当にありがとうございました。心からご冥福をお祈りいたします。

「小林清吾先生を偲んで」

川越 元久

2023年9月17日（日）

「今、愛児園です　カウンター433　先生お元気ですか？」

『ご報告をありがとうございます。順調に稼働中、よかったです。担当医の先生から、
退院を目指しましょう、と言っていただいていますが、今のところ未定です。』

「まだ、入院中でしたか！　退院したら連絡ください。」

『はい。』

「今日はタンク清掃と原液交換しています　ちゃんと動いてますからご安心ください」

『おひとりで？将来変わっていただける若手のどなたか、いらっしゃると良いですね。』

「いると良いですね！カウンター438　残留塩素0.3　正常稼働確認しました　撤収します」

『ご苦労様。』

このラインのやり取りが最後になってしまいました。

川崎愛児園にフロリデーション装置を搬入したのが、2016（平成28）年8月。暑い日で、新潟からのトラックが来るのを二人で首を長くして待ちました。待ちに待った装置を設置して、仲良く記念写真（写真1）を撮りました。その年の12月には「川崎愛児園施設フロリデーション運営協議会」を立ち上げ（写真2）、正式に稼働を開始しました。その後、いくつものトラブルもありましたが、知恵を出し合いなんとか二人で乗り越えてきました。現在では、ようやく装置の故障もなく、安定したフロリデーション水を子どもたちに提供する環境を整えることができました。

およそ3か月に一度、先生は我が子に会いに来るように新潟から川崎まで出張していただき、タンク清掃と原液交換におつき合いくださいました。コロナ禍前は、近くのホテルに前泊してお酒を飲みながら、過去の苦労話をはじめとするいろいろなお話も伺うことができました。いつもフロリデーションに対する熱量に圧倒され、元気をいただいていました。先生とは田園都市線溝の口駅の高架下で待ち合わせ、私の車に乗って愛児園まで行くのが常でした。大きなスーツケースに奥様手作りのいちごのマスコットをつけて、さっそうと歩いて車まで向かってくる姿が今でも瞼に浮かびます。

先生とお会いして「上流を目指せ」という教えに感銘し、それまで予防にさほど興味のなかった私が、どっぷりとフッ化物信者というか小林清吾信者となってしまいました。「上流を目指せ」は、私の臨床にも大きな変化をもたらし、補綴処置中心から予防処置中心にシフトしました。私の歯科医師人生の中で大きなターニングポイントとなったのが先生との出会いであったと、いまさらながらに気づかされます。先生には感謝の言葉しか浮かびません。

もう、愛児園の活動報告のラインは送ることができなくなりましたが、先生の遺志を継いで、装置が壊れるまでは子どもたちにフロリデーション水を共有していきますのでご安心ください。

虫の知らせか、11月9日に最後のラインを送りました。「小林先生、おはようございます　具合はいかがですか？」既読にはなりませんでしたが、もう会えなくなるとは思っていませんでした。残念で仕方がありません。川崎愛児園のフロリデーション装置には、先生の手書きの標語「フッ素でむし歯予防！」等が貼ってあり、今でも子どもたちを啓蒙し続けています。まだ、しばらく見守っていてください。合掌

川崎愛児園協議会

川崎愛児園WF装置前の清吾先生

川崎愛児園ポスター
制作（株）アイ・メディカル提供

川崎愛児園WF装置

「清吾先生に教えていただいた“公衆衛生”」

近藤 明徳

2011（平成23）年、岐阜歯科大学社会歯科医療研究会先輩の中村宗達先生から「清吾先生のフロリデーションを応援するから手伝わないか」のお誘いがきっかけで、清吾先生中心のウォーターフロリデーションファンドに参加し、清吾先生と少人数の会議などで過ごした約１０年は、僕の宝です。

清吾先生は、普通の開業歯科医で公衆衛生を知らなかった僕に「公衆衛生＝そこに住むだけでウェルビーイング、健康」を教えて下さいました。

う蝕予防の公衆衛生は「フロリデーション」しかありません。

集団フッ化物洗口はやむを得ない、代替え手段です。

幸い、僕の住む神戸市のマザーマウンテンの六甲山は花崗岩＝フッ化物の多い山で、六甲山からの湧き水はフッ化物約0.4ppm、う蝕予防効果があります。狭いですがその浄水場の地域では、何の問題もなく、住民のう蝕は60％予防できているはずです。

将来フロリデーションで「六甲の恵みが全市民に」になれば、「神戸市に住んでいるだけでむし歯は60％少ない」になります。

病気の予防には公衆衛生が必要ですね、が共通認識になれば「う蝕予防にも公衆衛生が必要ですね」になり、「フロリデーションしましょうか」になる未来は遠くないと思います。

僕の、院長室の机には、やさしく微笑む、清吾先生のご遺影があります。

毎日、清吾先生にご挨拶して、仕事が始まります。

清吾先生のご冥福をお祈り申し上げます。

清吾先生ありがとうございました。

「故小林清吾先生を偲んで」

日F常務理事 / 群馬県渋川市　**石田 覚也**

突然の訃報に接し、偉大な指導者を失った悲しみで一杯です。

故小林清吾先生を最初に知ったのは、神歯大を卒業して故飯塚喜一先生の口腔衛生学教室の大学院に入学した年でした。1977（昭和52）年秋東京で開催された日本口腔衛生学会でした。その学会でフッ素の安全性と危険性に関するシンポジウムがありました。当時フッ素反対の急先鋒の故高橋晄生氏がヤンムヤニス氏の「上水道フッ素化とがんの発生の関係」の論文を引っ提げて学会に乗り込んできた感じでした。当時、新潟大学歯学部予防歯科助教授の境　脩先生と激論し、会場からは当時新潟大学歯学部予防歯科に在籍していた小林清吾先生も加わり更に激しい論争になりました。学会初心者としては「学会ってスゲーところ！！」と鮮明に記憶に残っています。テレビでもフッ素のネガティブ報道がされ、神歯大の口腔衛生教室の先輩の安彦良一先生も抗議の電話をしたりしていましたが、安彦先生が新潟大学歯学部予防歯科の先生方と飲みながら懇談しようとの提案から、東京で会って飲んでフッ化物洗口推進を熱く語りあい、小林清吾先生他新大予防歯科の当時若い先生方と親しくなりました。その後は、日Fでご一緒させて頂き、小林清吾先生のフッ素によるう蝕予防の情熱にいつも触発されていました。また、学識経験者として日Fのシンクタンクとして世界中からの情報提供していただき、フッ素反対の盾になってくれました。

その後、日本大学松戸歯学部に赴任されて、フロリデーション装置を開発されました。そこでのWFの推進の思いから、1999（平成11）年第23回むし歯予防全国大会の研究集会（テーマFluoride for everyone）で東京で開催する大会会長として尽力されました。その時に実行委員に指名していただき、お手伝いさせていただきました。大会実行委員会には群馬から松戸まで通っての懐かしい思い出があります。WFに懸ける熱い思いに敬服していました。小林清吾先生と接した方々は、WFに懸ける熱い思いに感銘を受け行動を起こした先生方が沢山いますね。特に長崎大学歯学部の教授として教鞭を取っていた時の教え子門下生がWF実現に向けて活動していることに敬服しています。小林清吾先生のWF実現の情熱に協賛し活動の人づくりも先生の優しいお人柄と思います。

いつかの理事会だったか、理事の若返りが話に出た時に「我々老人は時間があり、まだまだ活動できる」と発言されました。日Fとして小林清吾先生のシンクタンクとしての学術情報の提供とWF実現の対策などまだまだ活躍をお願いしたいと思っていました。

『小林清吾先生がご存命中に日本の何処かでWFの実現を』との願いが叶いませんで、残念でなりません。

日Fの皆さんと共に小林清吾先生の思いを受け継いでいくでしょう。

どうぞ天国から見守ってください。

ご指導ありがとうございました。

ご苦労様でした、どうぞ安らかにお眠りください。

「最期まで熱かった清吾先生」

まんのう町国民健康保険造田歯科診療所　**木村 年秀**

私が参加した最初の学会は1986（昭和61）年、長野県で開催された日本口腔衛生学会総会でした。入局した岡山大学予防歯科は歯周病予防の臨床・研究が中心で、う蝕予防に関してはほとんど知識がなかったので、う蝕予防に関するシンポジウムを聞いてみることにしました。会場に入るとフッ化物について熱心に討論されている様子に驚きました。シンポジウムがそろそろ閉じられる時間帯に口腔衛生学会幹事長がお話をされているなか、時間がもったいないから俺にしゃべらせろとばかりに発言を遮った先生がいました。それが清吾先生でした。なんと恐ろしい先生かとその時は思いました。

それから4年、私は翌年春から島根県美都町国保歯科診療所に赴任することが決まりました。前年の12月、地域歯科保健の現場を学ぶために、渡邊達夫教授の命により都城の山下文夫先生を訪ねました。当時、山陰地方では集団フッ化物洗口が行われていなかったので、新任地で始めないといけないと決意したのですが、山下先生はすぐに当時新潟大学予防歯科助教授であった清吾先生に電話をかけられました。「今度、島根でフッ素洗口始める若い先生が新潟に行くから面倒をみてやって」と。

年が明けて雪が降りしきるなか、新潟を訪れました。怖いと思っていた清吾先生はとても優しい方でした。清吾先生が運転する車の助手席に乗り、弥彦小学校での歯科健診の様子を見学しましたが、子どもたちの虫歯の少なさに驚きました。弥彦では温泉宿に宿泊し、一緒に温泉によくつかりながら親しくお話をしてくださいました。フッ化物洗口の効果を目の当たりにし、導入戦術をお教えいただいたお蔭で、美都町では赴任した年に山陰地方では初めて、町内3か所すべての保育園でフッ化物洗口を開始することができました。

美都町での4年間の赴任が終え、岡山大学予防歯科に戻ることとなったのですが、教授から与えられたテーマは「幼児における食品からのフッ化物摂取量」の調査研究でした。アメリカの国立歯科衛生研究所（NIDR）に席を置かれていたアリス・ホロヴィッツ先生に研究のアドバイスをいただくためワシントンDCを訪れることになりましたが、ちょうどその時、NIDRに留学されていた清吾先生には、英語が上手くしゃべれない私とアリス先生との間に入っていただき、とても心強かったです。訪米中は清吾先生のアパートに泊めていただき、公衆衛生、フッ化物利用など熱心に教えてくださり、とても勉強になりました。清吾先生の語りは熱く、夜中になってもお話は止まりませんでした。山下先生が急逝された後は、益々フロリデーション実現への情熱が強くなられたように思います。最近、日Ｆ役員の若返りの必要性が議論されているなか、お金を貰わなくても喜んで働く経験豊富な先輩（清吾先生たち）をもっと使いなさいとの発言は、さすがだと思いました。

あまりにも早いお別れでしたが、最期まで清吾先生らしく生きられましたね。

ありがとうございました。

韓国独立記念館にて記念撮影
左から境脩先生、筆者、山下文夫先生、小林清吾先生、
西一也先生、山下美秋さん（山下先生の奥様）

「小林清吾先生を偲んで」

日F会員 / 埼玉県吉川市 **互 亮子**

分からないことがあると、だれかれ構わず電話して解決するという、何とも怠惰な学習法だったころ、偶然電話に出られた小林先生は、見ず知らずの私に懇切丁寧に応対して下さり、さらには関連資料まで送ってくださいました。奇しくも、その小林先生が日大松戸歯学部教授として赴任され、隣市のF先生のお計らいで、近隣の新潟大学同窓の先生方と一緒に、私は初めてお目にかかることができました。江戸川を挟んだ向こう岸に小林先生がいらっしゃることがとても嬉しく楽しみでした。

2000年4月宮崎県の山下文夫先生のお導きで「フッ素利用をすすめる女性の会」を結成し、5月吉川市民交流センター『おあしす』において発会式を行いました。小林先生は顧問として参加され「私が何故この会に参加しているかと申しますと、学術的な面でいろいろ応援させていただければというつもりからです。とりわけ、日本歯科医学会つまり日本の歯科分野の学術部門団体がごく最近、フッ素利用を日本でも進めようという方針をだしました。私も間接的にこの見解に関与している立場から、応援させていただければと思っております。」とおっしゃいました。以来、水道水フロリデーション（以下WF）地域啓発のため、ありとあらゆる機会でご指導とご支援をいただきました。

2007年11月『おあしす』で開催された吉川市民まつり、小林先生は歯学部の学生や大学院生らを引き連れ、若者たちを生の現場体験にいざないました。東北大学から田浦先生も駆けつけてくださり、お揃いのエプロン姿が光りました。

小林先生は市民から寄せられる素朴な質問をはじめとして、悪意を感じる質問にも、終始穏やかに誠意ある態度で応えられました。にわか仕込みの知識であたふたする私は頼り切り安心しきっていました。

2009年6月WF普及啓発活動の一環として、保健センター内にF水給水器が設置されました。議会日程を終えたばかりの市長や健康福祉部長、政策室長らがF水試飲に訪れ歓談されました。

その後、給水器の常時設置によって寄せられた、市民からの意見はWF反対が多く、分かりやすい解説文の準備に小林先生を煩わせてしまいました。

2012年2月イベント、よしかわマルシェに参加したときの様子です。着ぐるみ「ふろりん」を持って、はるばる京都から岩城先生が来てくださいました。岩城先生製作の「ふろりん」は初公開ながら、吉川市のゆるキャラ「なまりん」に負けず劣らず人気を博しました。

追い風に乗って順調かと思われていた啓発活動が、いつのまにか向かい風にあおられるようになり、担い手たちは同じ顔触れ、みな疲労感がにじむようになりました。仕事の傍らで活動することの限界に、差し迫った家族の事情が加わり、私はとうとう逃げ出してしまいました。小林先生に心からの深謝をお伝えできないまま！それが心残りです。

「小林清吾先生を偲んで」

茨城県土浦市歯科医師会　**長谷川 周**

小林清吾先生に初めてお会いしたのは、2000（平成12）年２月に茨城県土浦市で開催されたフッ化物の講演会でした。当時小林先生は日本大学松戸歯学部教授をされておられました。会場で日Fのパンフレットが配られましたので入会させていただきました。

その後は毎年、年賀状お送りするだけの関係でしたが、将来当地区でフッ化物洗口を実施するときサポートをお願いしようと細い糸を繋げてきました。

私が2015（平成3）年に土浦市歯科医師会会長に就任してから市議会や行政に働きかけ手ごたえを感じていた部分もありましたが、なかなか小学校でのフッ化物洗口までには繋がりませんでした。

2018（平成6）年3月、小林清吾先生に連絡を取り土浦市歯科医師会のフッ化物洗口推進活動に学術的な援助を頂ける専門家として東京歯科大学眞木名誉教授を紹介して頂きました。

2018年11月新潟県弥彦村への土浦市議会行政視察では、色々段取りをして頂き土浦市議会議員を迎えて頂きました。

その後も、土浦地区の養護教諭に対するフッ化物洗口勉強会や、茨城県学校薬剤師会に対するフッ化物洗口説明会でもZOOM等で参加して頂き助けてもらいました。小林清吾先生と出会っていなければ、また清吾先生の細かなアドバイスがなければ、土浦市内小学校フッ化物洗口は、いまだ始まっていなかったかもしれません。清吾先生の心温かいサポートに今でも感謝しております。

謹んで小林清吾先生のご冥福をお祈り申し上げます。

右列、土浦市議会議員

「人生をかけてAdvocacyをされてきた松原（小林）清吾先生を偲んで」

東京医科歯科大学 大学院医歯学総合研究科 健康推進歯学分野　**相田 潤**

日本の公衆衛生を考えると、フッ化物応用への理解はまだ十分でないと感じます。この根本的な理由は、エビデンスとインフォームドコンセント、そしてヘルスプロモーションの考え方が正しく理解されていないことが多いことだと思います。

インフォームドコンセントの概念の中では、エビデンスがある選択肢を患者や住民に説明するのが専門家の役割となっています。全ての選択肢を提示された上で、それを選択するのは患者や議会です。専門家が「日本ではどうせフッ化物洗口やフロリデーションは賛成されないから、情報提供をしない」と決めつけて行動してはいけません。これは臨床で、ブリッジや部分床義歯の選択肢を隠して、インプラントしかすすめないのが許されないのと同じです。全てのエビデンスに基づいた選択肢を知らなくては、患者や住民は正しい選択ができないのです。

またヘルスプロモーションにおいては、個人ではなく集団の意思決定が求められます。そのため、エビデンスに基づく政策を多くの人が正しく理解するためのAdvocacy（唱導・推奨）が必要とされます。ところが、フッ化物応用をめぐっては、「推進派」とか「反対派」とかいう言葉が今でも使われ、専門家として選択肢を提示するだけで「推進派」とレッテルを貼られたり、空気を読まないとして眉を顰められる状況があります。

このような日本の状況の中で、最前線でAdvocacyに尽力されてきたのが小林先生だと思います。小林先生は大量の時間やお金、そして人生の大部分をかけてフッ化物応用のAdvocacyを行ってこられました。多くの人が小林先生の言動からフッ化物応用への理解を深め、人々にフッ化物応用を推奨してきたことでしょう。私も確実にその一人です。

私が小林先生とお会いしたのは、日エフ会議か口腔衛生学会であったと思います。常にフッ化物応用のイベントと小林先生が一緒にある印象ですので、どちらが最初かを思い出すことが出来ません。アメリカのフロリデーションの記念式典にも連れて行っていただきました。下仁田でフロリデーション水によるこんにゃくづくりもしました。温泉の露天風呂でお話ししたこともあります。仙台のホテルで奥様とお二人の時にお会いしたこともありました。

多くの思い出があり、笑顔の先生に今でもお会いできるような気がしてしまいます。　日本のフッ化物応用を文字通りけん引されてこられた小林先生に顔向けできるよう、フッ化物応用の推進に尽力していかなくてはと思います。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

SCHOOL OF
PUBLIC HEALTH

May 17, 2024

「Remembering Seigo Kobayashi」

Dr. Seigo Kobayashi spent a year with us at the National Institute of Dental and Cranial Research (NIDCR), National Institutes of Health as a visiting scientist. During that time, we got to know him well. One Sunday shortly after Seigo arrived in Maryland, he called us to say that he had found JUST the very car he wanted. It was a blue car that he had fallen in love with. Although Hersh (my husband) tried to convince him that he may want to look around more because the car was in Virginia and that meant he had to re- register the car in Maryland which would cost more money. No, he had to have that blue car….and he did. Seigo and Dr. Yoon, a Korean visiting scientist, were pals for the year. They spent a lot of time at our house, and we did many activities throughout the area.

Seigo was a very special dedicated public health dentist. His interest and dedication to prevent dental caries by providing fluoride mouth rinse to children in schools and to get community water fluoridation re introduced in Japan was incredible. During his time with us at the NIDCR, he worked very hard to prepare a research manuscript in English for publication. Not an easy task, but he did it.

One of the many things he did to educate more about community water fluoridation was to contact the American Dental Association (ADA) for permission to publish Fluoridation Facts in Japanese to distribute throughout Japan. He worked with two important groups in Japan to foster community water fluoridation: Oral Health Association of General Incorporated Foundation and NPO Corporation of Japanese society for fluoride caries prevention. Because Fluoridation Facts was revised periodically, he would recontact the ADA for the current publication and have it translated.

Seigo was a kind, family man with a wonderful sense of humor. I remember when his wife came to visit while he was in Maryland, he was just absolutely thrilled to see her and have her at his side. He also was so excited when his twin grandchildren were born.

One of the last communications I had with him was that he told me he was not going to drink any alcohol until he got a specific water fluoridation project started. I am honored to have worked with him and to get to know him on a personal level.

Dr. Kobayashi left us way too early. He was a dynamic leader in dental caries prevention and our colleagues must, simply, must carry on his work.

Alice M. Horowitz, RDH, MA, PhD
School of Public
University of Maryland
College Park, MD 20742

SCHOOL OF
PUBLIC HEALTH

「清吾小林を偲んで」

ドクター清吾は、訪問研究員としてアメリカ国立衛生研究所（NIH）の国立歯科・頭蓋顔面研究所（NIDCR）で1年間を私たちと共に過ごしました。その期間を通して、私たちは彼と親しくなりました。清吾がメリーランドに到着して間もない日曜日、彼は「まさに望んでいた車を見つけた！」と電話してきました。それは青い車で、彼はその車に一目惚れしたのです。私の夫のハーシャルは、その車がバージニアにあり、メリーランドで再登録する必要があるため、もう少し他の車を探した方が良いと説得しようとしました。再登録にはお金もさらにかかります。しかし、、、、彼はどうしてもその青い車が欲しいと言い張り、ついにはその車を購入したのでした。清吾と韓国からの訪問研究員ユン博士は親しい友人でした。彼らはよく私たちの家で過ごし、地域で多くの活動を一緒に行いました。
清吾は非常に特別で献身的な公衆衛生歯科医でした。学校の子供たちにフッ化物洗口液を提供することでう蝕を予防し、日本で水道水フロリデーションを再導入するという彼の目標と人生を賭けた活動は、素晴らしいものでした。NIDCRにいる間、彼は英語での研究論文の執筆に熱心に取り組みました。もちろんそれは簡単なことではありませんでしたが、彼はそれをやり遂げたのでした。
水道水フロリデーションの啓発のために彼はたくさんのことをしました。その一つとして、アメリカ歯科医師会（ADA）に連絡し、「フロリデーション　ファクツ」を日本語に翻訳し日本中に配布する許可を得ました。彼は、日本で水道水フロリデーションを促進するために、一般社団法人口腔衛生学会およびNPO法人日本フッ化物むし歯予防協会という二つの重要な団体と協力しました。「フロリデーション　ファクツ」は定期的に改訂されるため、彼は常に最新の版をADAに再度問い合わせ、翻訳していました。

清吾は優しく、ユーモアのセンスに溢れた家庭を大切にする人でした。彼の奥さんがメリーランドを訪れた時、彼は再会し、そばにいることに非常に喜んでいたのを覚えています。また、双子のお孫さんが生まれた時も、非常に興奮していました。

最後に彼とやり取りした際、彼は水道水フロリデーションが具体的に始まるまでアルコールを一切飲まないと言っていました。私は彼と仕事をし、個人的に親しくなれたことを光栄に思います。

ドクター清吾はあまりにも早く私たちのもとを去りました。彼はう蝕予防の分野で非常に素晴らしいリーダーでした。私たちは絶対に、彼の仕事を引き継いでいかなければなりません。

アリス ホロウィッツ博士
メリーランド大学 公衆衛生学部

（日本語訳　松尾剛先生）

「小林清吾先生を思う」

釜山大学校歯学大学院 名誉教授　**金鎭範（KIM Jin-Bom）**

小林清吾先生との交流は1980年代から始まりました。当時、私は韓国国立保健院に在職中であり、主要業務の一つとして1981年（昭和56年）から韓国で開始された水道水フロリデーションプログラムについて保健社会部に諮問することでした。当時、小林清吾先生は新潟大学歯学部に在職中であり、新潟大学歯学部予防歯科学教室はフッ化物洗口プログラムを日本全国に普及させるリーダーの役割を担っていました。

したがって、むし歯予防のためのフッ化物の利用について、韓国と日本の交流は両国の口腔健康増進にシナジー効果をもたらすことができました。新潟大学の予防歯科学教室員が1980年代初めに韓国の清州市の水道水フロリデーションプログラム浄水場を訪問し、私は1992年（平成4年）に新潟大学を訪問して韓国の水道水フロリデーションプログラムの現況について発表しました。

1991年（平成3年）私が釜山大学校に勤め始め、日本むし歯予防フッ素推進会議が主催する全国大会と日本口腔衛生学会が主催する学術大会等において、小林清吾先生をはじめとし、フッ化物を利用してむし歯予防をしようという日本の歯科医師との交流が急増し活発になりました。

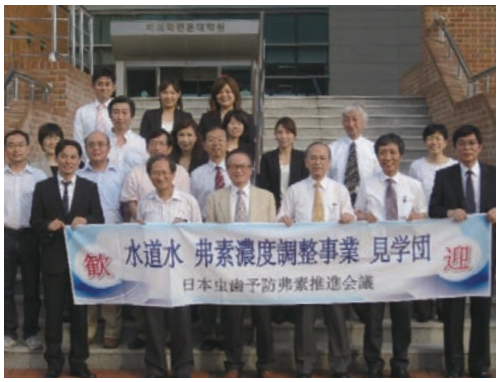
特に、小林清吾先生は、フッ化物を用いたむし歯予防プログラムの研究と実行に誰よりも積極的でした。小林清吾先生の計らいで数多くの日本歯学部教授や教員、市議会議員、言論記者たちが釜山近隣で水道水フロリデーションプログラムを施行する金海市、昌原市、晋州市、陜川郡の浄水場を訪問し、日本の新聞やテレビにも紹介されました。

2010年（平成22年）には、小林清吾先生は、境 脩先生とともに日本の歯学部教員と地域社会で診療する開業歯科医師とともに歯学部の学生を引率し、金海市と昌原市の浄水場を訪問した後、釜山大学校の歯学部を訪問して釜山大学校の歯学部学生たちと日本の歯学部の学生たちが水道水フロリデーションプログラムについて討議をすることで、口腔健康増進のための未来世代の親善交流にも貢献されました。

私も小林先生の紹介で、何度も日本むし歯予防フッ素推進会議が主催するむし歯予防全国大会、日本口腔衛生学会が主催する学術大会、さらに秋田県歯科医師会主催講演会や対馬島で開催された長崎県歯科医師会主催の講演会で韓国におけるむし歯予防のための水道水フロリデーションプログラム、フッ化物応用などについて講演して討論し、また歯学部の学生たちに講義する機会を設けていただきました。

小林清吾先生はむし歯予防のためのフッ化物の利用についての学術大会や討論会にはどこからでも駆けつけて積極的に取り組まれました。2011（平成22年））7月14日、韓国の仁川で開催された韓国水道水フロリデーション30周年記念学術大会にも参加され、韓国の水道水フロリデーションを応援してもらいました。

現在、日本の12歳児の平均むし歯経験歯数（DMFT index）が大幅に減少し歯の健康度が向上してきた状況には、小林清吾先生が見せてくださった信じられないほどの情熱と御活躍に負うところが大きいと思い、心より先生の御冥福をお祈りいたします。



2010年（平成22年）7月26日 金海市 水道水フロリデーション浄水場訪問

2011年（平成23年）10月8～10日　第60回日本口腔衛生学会
日本大学松戸歯学部 学会長 小林清吾教授

「小林（松原）清吾先生との思い出」

仲田 俊一

小林清吾先生との初めての出会いは確か1983・4年の春先、新潟大から長崎大に転勤される途中、私が勤務していた会社の銀座の事務所に福岡歯科大学の境　脩教授とご一緒に訪ねてこられた時だったと思う。

私は既に「宮崎県子供の歯を守る会」の山下文夫歯科医と交流関係を築いていたので彼と小林先生は新潟大学歯学部の同窓生とのことでご紹介されたことも記憶に残っている。ご来訪の要件は簡易な使い捨て容器入り「フッ化物洗口液」の導入案件でした。

その後、この案件は進行せず、数年が経ち、山下先生からの話で小林先生が長崎大学から日大松戸歯学部に転職され講義を聴講させてもらえるとのことで山下先生と出向くことになり、ついでに松戸のご自宅にお邪魔し、翌日は三人で東北大学医学部病院に田浦勝彦先生にお会いするため仙台に向かい、既に予約されていた秋保温泉の古宿に宿泊して四人揃って「フッ素談議」に花を咲かせたことから、殊に山下先生には「フッ素への思い」に火が付いたような感じでした。その後の活動は「宮崎県子供の歯を守る会」から「日本むし歯予防推進会議（日F）」まで発展させ、日本全国への活動範囲はもとより韓国、中国にまで啓蒙・交流する機運が仙台で生まれたのではないかと思い出されます。この時から私は小林教授のことを「清吾さん」と呼ばせてもらうようになった。既に小林姓から松原姓に改正するとの話も伺っていた。

確か「日F」が発展してNPO法人化された頃だったのか、清吾さんは「フローリデーション」の実現化にかなり熱中され始めておられたが、私は立場上「フッ素」のむし歯予防効果を啓蒙するためには「フッ素配合歯磨剤・洗口液」「フッ素塗布」等の啓蒙運動を優先すべきであることを主張し続け、平成7年（1995年）10月10日北海道大学で催された第44回日本口腔衛生学会総会では「世界のフッ化物配合歯磨き剤の動向について」と題して講演した。このことに対し、日本歯磨工業会会長から「歯磨有用論」を唱えてくれたと感謝状を授与されたのは、全く滑稽なことで、それは「フッ素」に対する行政や政治的な「抵抗勢力」を論破できる環境整備は整っていない最中の時だったからともいえる。

私は1999年末に予防歯科関連業界から身を引いても清吾さん、山下先生、田浦先生とは機会あるごとにお付き合いは継続していたが、「フローリデーション＝水道水のフッ素化」のテーマについては退職前に山下先生、清吾さんと個別に議論を交わす機会があり、日本での実施は日本人独特の文化的・心理的な感覚の相違から諸外国とは異なり抵抗勢力への説得に多大な困難が伴うとの議論を交わしたことがある。アメリカから設備技師のトム・リーブス夫妻をお呼びして私まで紹介され親しく情報交換させてもらったこともあり、清吾さんは徹底的に「フローリデーション」に「信念」を貫き実施計画の研究を重ねておられたようだ。

清吾さんは日大松戸歯学部を退任し新潟で「隠居する」と言われ、その時「仲田さん歯科大学での予防歯科講座はだんだん衰退しつつある。寂しい限りだ」と嘆いておられたのが印象的です。

私は「日F」がその前身の「日本むし歯予防フッ素推進会議」の時代に、理事役員としてメンバーに加えてもらっていたが、ＮＰＯ法人化した時点で一般人の理事は選出されていない団体になったようである。理由は定かではないけど。歯科専門家ばかりの集団でなく一般国民生活者にも門戸を開き、広く全国各地に支部づくりを目指していたころのメンバーだったので、その立場で清吾さんとは議論させていただいていた。

1980年～1990年代は「フッ素による虫歯予防効果」の知識普及が中心で歯科医師の国家試験にやっと一問だけ出題されるようになったと聞かされ、私が北海道大学で開催された日本口腔衛生学会で「世界のフッ化物歯磨き剤の動向について」というテーマで発表させていただいたのは平成７年（1995）10月10日、日本歯磨工業会会長から「歯磨有用論の一層の推進を図リ業界発展のために尽力した」と感謝状を頂いたのは4ヶ月後の平成8年（1996）2月27日であった。当時のフッ素配合歯磨剤は配合量が1000ppm以下にコントロールされており、それ以上は0.1ppmたりとも超えることは許さない厳格な規制となっていた。それが1500ppmまで規制緩和されたのは平成29年（2017年）3月17日のことであり、22年もかかって欧米並みになったのである。その間日本国民のむし歯罹患率はどう推移し、弊害を被った人の責任の所在は？

このころの啓蒙書「フッ素による虫歯予防効果」を説いた書物としては歯科医師　山下文夫、田浦勝彦、木村年秀共著による「虫歯とキッパリ別れる本」があり具体的な活動まで記されているが、歯磨き剤のフッ素濃度のレベルアップやフッ素洗口液の普及、小学校でのフッ素塗布実施など生活者へのアピールが日本では遅々として進行しない状況であった。にもかかわらず、上記三名の歯科医に加えて藤野悦男先生四名の著書「虫歯の敵は幾万ありとても」は「虫歯予防の決め手は水道水フッ素化だ！」へと走りすぎていたのである。即ち、アリス・ホロビッツ先生が当初から教授されてきた「Community　Outreach＝地域活動への活動化」の重要性が日本ではないがしろにされていたと言えよう。このことは「歯科医専門家」の責任逃れであり、いつかしっぺ返しに専門医としての「職業的責任」を法的訴訟として訴えられる羽目に陥ると私は「歯科医でなく生活者の立場」を理由に今は亡き「山下文夫先生」や「清吾さん」を議論相手になってもらえたことが何よりの慰めになっていた。しかし、1990年代末から2000年の初め頃から「日F」の活動は「水道水フッ素化」運動に方向へとジャンプして行ったようで「虫歯の敵は幾万ありとても」にはその活動の方向性が明記されています。

2017年の夏、山下先生の満17年忌の法事を都城で催そうということになり「宮崎県子供の歯を守る会」や初期の「日Ｆ」のメンバーに呼び掛けることになり、アリス・ホロビッツ先生をご招待することを提案したら、清吾さんがアメリカからの旅費宿泊費の半分は自分が負担すると申し出ていただき、しかも羽田での出迎えと帰国のご面倒を引き受けてもらったこともあります。

翌年の2018年5月私は沖縄県歯科医師会から「8020達成」の表彰を受けその祝賀会に田浦先生と清吾さんが馳せ参じていただき、清吾さんはアリス・ホロビッツ先生から頂いた私への祝福のメッセージを英文のまま代読していただいた。その後年賀状は毎年継続していただいていたが2022年（令和4年）はLINEで9月3日（土）21：06に頂いた『仲田先生、台風、どうぞご注意ください。被害無き事祈ります。（新潟・小林）』とのメッセージを頂き、それが最後の言葉で、その記録が今でもLINEに残っています。

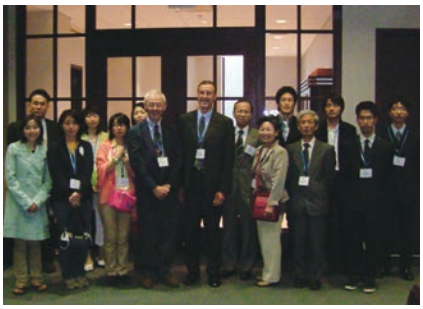
清吾さん私より一回りも未だ若いのに早すぎるよ。議論の相手になっていただきありがとう。多くを学んだ。ご冥福を祈る。

令和6年8月

Memories Photos

2005年　NIH ①

2005年　NIH ②



2005年　シカゴ ①

2005年　シカゴ ②

2005年　シカゴ ③

2005年　シカゴ ④

2005年　シンシナティ

2005年　ボストン

2006年　ニューブラン先生来日

2006年　ニューブラン先生（吉川市）

2006年　ニューブラン先生（松戸市）

2006年　松戸市民祭

2006年　WF装置完成（松戸市）①

2006年　WF装置完成（松戸市）②

2006年　日F 第30回東京大会

2007年　下仁田保健センター ①

2007年　下仁田保健センター ②

2007年　下仁田保健センター ③

2007年　下仁田保健センター ④

2007年　下仁田保健センター ⑤

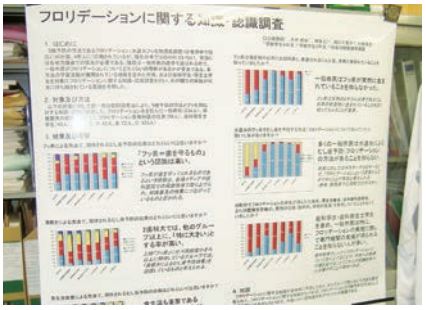
2007年　下仁田保健センター ⑥

2007年　下仁田保健センター ⑦

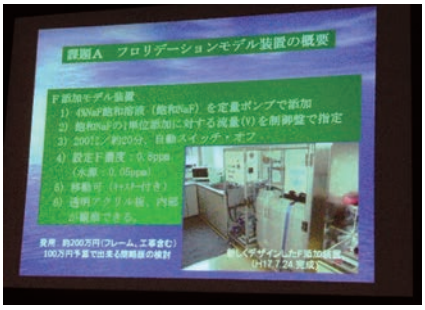
2007年　下仁田保健センター ⑧

2007年　下仁田保健センター ⑨

2007年　第56回 日本口腔衛生学会・総会



2007年　学会配属発表 ①



2007年　学会配属発表 ②

2007年　学会配属発表 ③

2009年　第33回 富山大会、新潟大同窓会

2010年　WF施設研修（釜山）

2014年　第37回 岐阜大会 座長

2015年　吉川フォーラム懇親会 ①

2015年　吉川フォーラム懇親会 ②

2015年　学会（筑波）

2016年　学会（お茶の水）

2017年　WFF総会（市ヶ谷）

2017年　横田基地見学 ①

2017年　横田基地見学 ②

2018年　自宅の畑 ①

2018年　自宅の畑 ②

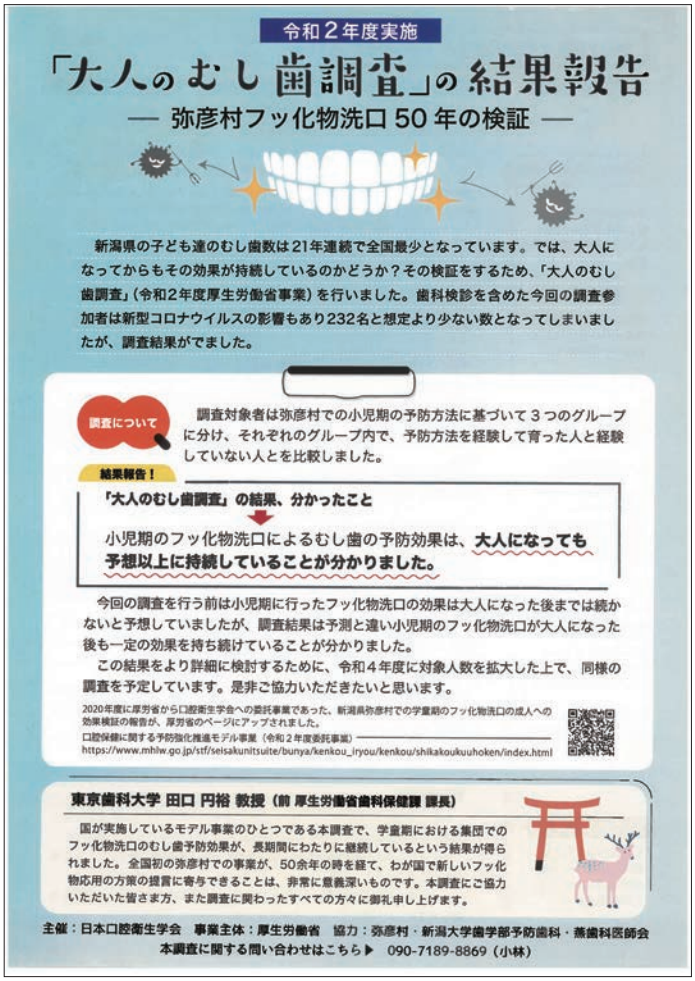
2004年　盛岡学会での「わんこそば」＜番外＞

2023年 11月13日 ご逝去

11月15日 お通夜　　11月16日ご葬儀

Research results

2020年　弥彦調査協力依頼リーフレット　（表↑　裏→）



令和２年度実施

「大人のむし歯調査」の結果報告

― 弥彦村フッ化物洗口 50 年の検証 ―

新潟県の子ども達のむし歯数は21年連続で全国最少となっています。では、大人になってからもその効果が持続しているのかどうか？その検証をするため、「大人のむし歯調査」（令和2年度厚生労働省事業）を行いました。歯科検診を含めた今回の調査参加者は新型コロナウイルスの影響もあり232名と想定より少ない数となってしまいましたが、調査結果がでました。

調査について

調査対象者は弥彦村での小児期の予防方法に基づいて３つのグループに分け、それぞれのグループ内で、予防方法を経験して育った人と経験していない人とを比較しました。

結果報告！

「大人のむし歯調査」の結果、分かったこと

小児期のフッ化物洗口によるむし歯の予防効果は、**大人になっても予想以上に持続していることが分かりました。**

今回の調査を行う前は小児期に行ったフッ化物洗口の効果は大人になった後までは続かないと予想していましたが、調査結果は予測と違い小児期のフッ化物洗口が大人になった後も一定の効果を持ち続けていることが分かりました。

この結果をより詳細に検討するために、令和４年度に対象人数を拡大した上で、同様の調査を予定しています。是非ご協力いただきたいと思います。

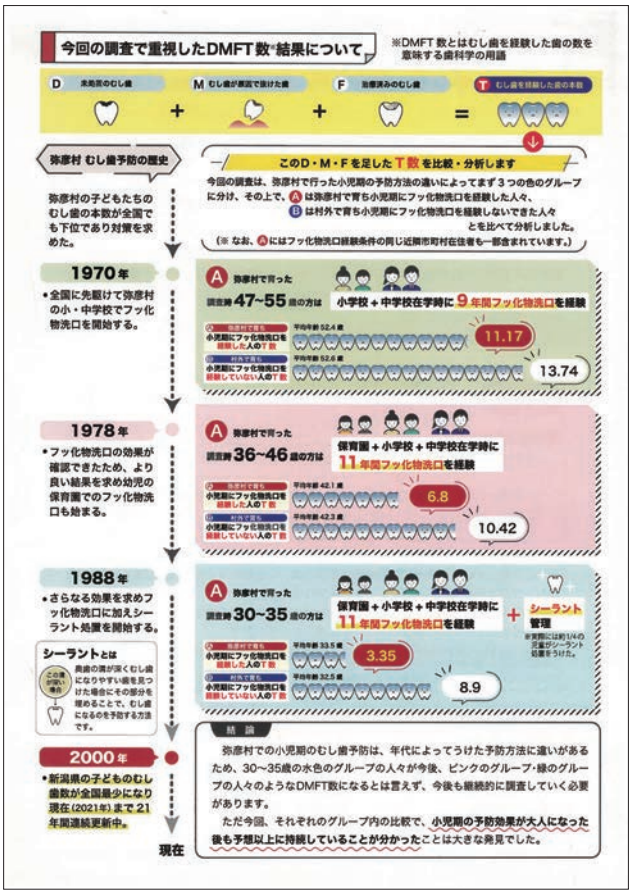
2020年度に厚労省から口腔衛生学会への委託事業であった、新潟県弥彦村での学童期のフッ化物洗口の成人への効果検証の報告が、厚労省のページにアップされました。
口腔保健に関する予防強化推進モデル事業（令和２年度委託事業）
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryou/kenkou/shikakoukuuhoken/index.html

東京歯科大学 田口 円裕 教授（前 厚生労働省歯科保健課 課長）

国が実施しているモデル事業のひとつである本調査で、学童期における集団でのフッ化物洗口のむし歯予防効果が、長期間にわたりに継続しているという結果が得られました。全国初の弥彦村での事業が、50余年の時を経て、わが国で新しいフッ化物応用の方策の提言に寄与できることは、非常に意義深いものです。本調査にご協力いただいた皆さま方、また調査に関わったすべての方々に御礼申し上げます。

主催：日本口腔衛生学会　事業主体：厚生労働省　協力：弥彦村・新潟大学歯学部予防歯科・燕歯科医師会
本調査に関する問い合わせはこちら▶　090-7189-8869（小林）

2021年　弥彦調査結果リーフレット　（表↑　裏→）



今回の調査で重視したDMFT数*結果について

※DMFT 数とはむし歯を経験した歯の数を意味する歯科学の用語

D 未処置のむし歯 ＋ M むし歯が原因で抜けた歯 ＋ F 治療済みのむし歯 ＝ T むし歯を経験した歯の本数

弥彦村 むし歯予防の歴史

弥彦村の子どもたちのむし歯の本数が全国でも下位であり対策を求めた。

1970年
・全国に先駆けて弥彦村の小・中学校でフッ化物洗口を開始する。

1978年
・フッ化物洗口の効果が確認できたため、より良い結果を求め幼児の保育園でのフッ化物洗口も始まる。

1988年
・さらなる効果を求めフッ化物洗口に加えシーラント処置を開始する。

シーラントとは
奥歯の溝が深くむし歯になりやすい歯を見つけた場合にその部分を埋めることで、むし歯になるのを予防する方法です。

2000年
・新潟県の子どものむし歯数が全国最少になり現在（2021年）まで21年間連続更新中。

現在

このD・M・Fを足したT数を比較・分析します

今回の調査は、弥彦村で行った小児期の予防方法の違いによってまず３つの色のグループに分け、その上で、Ⓐは弥彦村で育ち小児期にフッ化物洗口を経験した人々、Ⓑは村外で育ち小児期にフッ化物洗口を経験しないできた人々とを比べて分析しました。
（※なお、Ⓐにはフッ化物洗口経験条件の同じ近隣市町村在住者も一部含まれています。）

Ⓐ 弥彦村で育った 調査時47~55歳の方は 小学校＋中学校在学時に9年間フッ化物洗口を経験
Ⓑ 村外で育ち小児期にフッ化物洗口を経験していない人のT数 平均年齢 52.4歳 11.17
Ⓐ 小児期にフッ化物洗口を経験した人のT数 平均年齢 52.6歳 13.74

Ⓐ 弥彦村で育った 調査時36~46歳の方は 保育園＋小学校＋中学校在学時に11年間フッ化物洗口を経験
Ⓑ 村外で育ち小児期にフッ化物洗口を経験していない人のT数 平均年齢 42.1歳 6.8
Ⓐ 小児期にフッ化物洗口を経験した人のT数 平均年齢 42.3歳 10.42

Ⓐ 弥彦村で育った 調査時30~35歳の方は 保育園＋小学校＋中学校在学時に11年間フッ化物洗口を経験 ＋ シーラント管理
※実際には約1/4の児童がシーラント処置を受けた。
Ⓑ 村外で育ち小児期にフッ化物洗口を経験していない人のT数 平均年齢 33.5歳 3.35
Ⓐ 小児期にフッ化物洗口を経験した人のT数 平均年齢 32.5歳 8.9

結論

弥彦村での小児期のむし歯予防は、年代によってうけた予防方法に違いがあるため、30~35歳の水色のグループの人々が今後、ピンクのグループ・緑のグループの人々のようなDMFT数になるとは言えず、今後も継続的に調査していく必要があります。

ただ今回、それぞれのグループ内の比較で、**小児期の予防効果が大人になった後も予想以上に持続していることが分かった**ことは大きな発見でした。

改定 2021.10.21.

弥彦計画 基本的視点（令和弥彦会案）

1. 最終目標は**水道水フロリデーション**の導入、とする。フッ化物（洗口）によるむし歯予防 50 年の歴史、厚生労働省事業としての“大人のむし歯調査”実施、村民と村長はじめ村行政保健担当者・教育長・商工会議所局長等など、キーパースンのむし歯予防に対する関心度が高いことから、弥彦村はわが国の中で実現性の高い最有力候補と考えられます。

2. 一カ所も実施地区の無いわが国で、水道水フロリデーション導入の可能性を高める方策は、定まったものは見つかっていないと考えられます。この現状の中で、いかにしたら実現性を高めることができるかは重要な検討課題ではありますが、さらに重要な課題は、実現に向け勇気を持って**再度挑戦**することと考えます。とりあえずでも最善とする方策を選んで、トライ・アンド・エラーを繰り返しながら、もう一歩、もう一歩と進む姿勢を選びたい。途中までででも、その軌跡は他地区のトライに役立つことを信じて。

3. **村民の、村民による、村民のための健康つくり**、を表看板に掲げ、**導入**としては村民に対する“むし歯は予防できる、子どもから大人まで”の啓発から始める。そのまとめとして、世界の医学・保健専門機関によって認められた水道水フロリデーションの効果、安全性、実効性に関する科学を学ぶ。積気よく住民学習会を重ね、村民の理解を深める。村長・村議会に検討を要望。

4. 最終的な村行政の方針を決定する**村長・村議会**に対しては、住民学習活動と並行して水道水フロリデーションの関する科学情報を提供する。米国・カナダ、オーストラリア・**シンガポール**（小林 豊彦 村長・日本経済新聞支局長で在住歴あり）などのフロリデーション先進国との交流を活用する。

（資料 1）

弥彦”大人のむし歯調査”報告会（案）

目　的：“大人のむし歯調査”結果を学習し、小児期におけるフッ化物洗口 50 年間の成果を踏まえて、今後 30 年、50 年の新しいむし歯予防を考える。なお、先に行われた令和 2 年度厚生労働省事業：「弥彦村・大人のむし歯調査」に加え、令和 4 年度に追加調査を日本口腔衛生学会事業として実施予定、30 歳代、40 歳代、50 歳代における持続予防効果の評価が進められている。

開催日（予定）：令和 4（2022）年、6 月中旬（むし歯予防週間の後）
主　催：弥彦村住民組織　大会会長・藤井 宣秀　（ 藤井商店 社長 ）
　　事務局「令和弥彦会」（現在 11 名に、弥彦住民からも参加 20 名に増員予定）
共　催：認定 NPO ウォーターフロリデーション・ファンド
　　NPO 日本フッ化物むし歯予防協会
協　力：弥彦村・燕歯科医師会
　　全国からの協力ボランティア（個人単位、30～50 名）（下記の 4 つの分化会に所属を依頼）

アピールポイント：
- “むし歯は防げる：日本一むし歯の少ない弥彦村成人を世に示す。むし歯ゼロ集団（厚労省事業：大人のむし歯調査より、30 歳大人の 40%は DMFT 0 ）の存在をアピール。”
- “村民の、村民による、村民のための、健康な生活環境作り ”
- “弥彦村に暮らしているだけで、いつの間にか日本一丈夫な歯 “
- ”水道水フロリデーションの有効性・安全性・実効性の科学を学ぶ “
- ”フッ化物洗口で負担してもらっている学校での苦労を解消でき、教職員組合も賛成したい地域全体の、水道水フロリデーション”

全国からの協力ボランティアによる 4 つの分科会

（1）水道水フロリデーションの理念作り：社会的決定因子、フロリデーションは SDGs に沿ったむし歯予防、感染症パンデミックに負けない社会免疫
（2）全国各地からの支援メッセージのとりまとめと編集、村長・村議会へ提出
（3）海外先進国（米国・オーストラリア・シンガポール）の紹介、交流
（4）展示ブース（フロリデーション・システムの見える化）（フロリデーションの科学）

＊　本事業に関する経費が弥彦村の負担にならないように、全国からの募金も検討する。

（資料 2）

弥彦宣言

弥彦小学校で開始したフッ化物洗口の五十年間の成果およびその影響を鑑み、今後、成果の継続、およびフロリデーションの実施に向けた取り組みも含めた新たな展開も視野に入れ、お口の健康から健康長寿を目指していくことを宣言する。

令和三年十月九日

新潟県歯科医師会

（資料 3：第43回新潟大会にて）

確定できたデータ363名　うち歯科検診あり232名（63.9%）

口腔診査実施 232名 の内訳（洗口経験分類を年代別に考慮）

		フッ化物洗口（FMR）経験			計（名）
		なし	部分的実施	完全実施	
年齢群	I (47-55歳)	34	15	23	72
	II (36-46歳)	36	34	45	115
	III(30-35歳)	10	14	21	45
	計	80	63	89	232

＊：年齢群 Ⅰ はFMRを9年実施、ⅡとⅢは11年実施

各年齢群における分析課題
年齢群Ⅰ：小学1年生より中学卒業までFMR継続実施の意義を評価
年齢群Ⅱ：4歳児より中学卒業までFMR継続実施の意義を評価
年齢群Ⅲ：4歳児より中学卒業まで
FMR継続実施+計画的シーラントを評価

48

（資料 4）

わが国の地域水道水フロリデーション ファイターを偲んで

半世紀以上にわたり日本の非常識に挑戦され続けた松原（小林）清吾先生が忽然と旅立たれて早1年になろうとしています。柔和な清吾先生の遺影から、学友、学生、地域の人々に優しく接してこられたお姿が偲ばれます。

一周忌を前に、大変多くの皆様からご寄稿いただき、厚く御礼申し上げます。本追悼集は、地域水道水フロリデーション実現に奮闘する仲間たちが、今も清吾先生を慕い、先生が実践されてきた歯の健康づくりのための社会的支援活動に捧げた情熱を忘れない沢山の追悼メッセージや思い出エピソードに満ち溢れています。

さて、2021年10月の「弥彦宣言」（新潟県歯科医師会）では「フロリデーションの実施に向けた取り組みも含めた新たな展開」に言及しています。これは清吾先生からの私たちに与えられた宿題と言えましょう。2024年6月奥様から頂いた資料の中に、清吾先生が書き遺された「弥彦計画 基本的視点（2021年10月21日；資料1参照）」には「村民の、村民による、村民のための健康つくり」を表看板に、最終目標は「水道水フロリデーションの導入とする」と明記されています。水道水フロリデーション実現のため、「世界の医学・保健専門機関によって認められた水道水フロリデーションの効果、安全性、実効性に関する科学を学ぶ。根気よく住民学習会を重ね、村民の理解を深める。」ことを強調されています。

清吾先生への思いは変わらなくても、時間と共に記憶が薄れていくのは仕方のないことです。清吾先生から学び、水道水フロリデーション実現への取り組みに共に活動してきた人たちの気持ちが文字となり、形として遺すことができました。これから私たちは清吾先生の遺志を継いで地域住民の信頼と協力を得ながら水道水フロリデーション実現への道を切り拓くよう行動してゆきましょう。

本追悼集発行に際して、ご尽力下さった方々に心より感謝申し上げます。

2024年11月吉日

『故 松原（小林）清吾先生追悼集』製作委員会一同

寄稿者一覧（五十音順）

相田　潤	荒川浩久	有田信一	安藤雄一	石上和男	石田覚也	岩城倫弘
榎田中外	遠藤眞美	加藤尊巳	神庭　仁	川越元久	川崎浩二	木村年秀
金　鎭範	近藤明徳	斎藤慎一	須藤明子	田浦勝彦	互　亮子	髙瀬浩幸
田口千恵子	田口円裕	鶴本明久	仲田俊一	浪越建男	野上成樹	萩原吉則
長谷川周	平井城央	深田孝宏	松尾　剛	山内晧央	山本武夫	葭原明弘

Alice M. Horowitz

『清吾先生を偲んで』追悼集製作委員会世話人名

山内晧央	世話人代表（前NPO日F会長）
田浦勝彦	世話人（NPO日F顧問）
浪越建男	世話人（NPOウォーターフロリデーションファンド理事長）
岩城倫弘	世話人（NPOウォーターフロリデーションファンド事務局）
田口千恵子	世話人（日本大学松戸歯学部）
平井城央	世話人（日本医科大学大学院）
髙瀬浩幸	世話人（株式会社アイ・メディカル）
山本武夫	世話人・事務局（NPO日F専務理事）

『清吾先生を偲んで』

令和6（2024）年11月13日発行（清吾先生祥月命日）

企画・発行　松原（小林）清吾先生追悼集製作委員会
〒932-0231 富山県南砺市山見1134-1
TEL（0763）82-5323　FAX（0763）82-6695
E-mail: ymmt@f-take.com

編集・制作　株式会社アイ・メディカル
〒113-0033 東京都文京区本郷4-3-4
TEL（03）5804-6480

（非売品）本書の無断複写は、著作権法上での例外を除き、禁じられています